

宇都宮大学
留学生教育研究論集
第7号

留学生・国際交流センター一年報
2015年度

2016年8月

宇都宮大学留学生・国際交流センター
Center for International Exchange
Utsunomiya University

目次

センター長挨拶

留学生・国際交流センター長 横田 信三	1
---------------------------	---

留学生教育研究論集 第7号

<研究論文>

日本語を第二言語とする子どもたちのためのリライト教材作成に関する方法論的検討
— 一日常会話レベルから教科書レベルへの橋渡し —

鎌田 美千子	3
--------------	---

留学生・国際交流センター年報 2015年度

I 留学生・国際交流センターの概要

1 沿革・使命	15
2 組織	16
3 年間行事	16

II 留学生・国際交流センターの活動

1 教育・授業	21
1.1 留学生・国際交流センター開講授業	21
(1)「初級日本語補習Ⅰ」「初級日本語補習Ⅱ」	21
(2)中級日本語短期留学プログラム	22
(3)中級日本語補習	26
(4)学部1年生日本語補習	26
(5)日本語以外の関連科目	27
1.2 基盤教育および学部・大学院での授業	28
(1)日本語科目	28
(2)日本語以外の授業科目	29
1.3 留学生プログラム	31
(1)日韓共同理工系学部留学生予備教育	31
(2)日本語・日本文化研修留学生プログラム	31
1.4 英語関連科目	33
2 相談体制・生活支援	36
2.1 基本的認識	36
2.2 相談体制	36
2.3 相談実績	37
2.4 支援活動	38
2.5 各種オリエンテーション	38
2.6 外国人留学生見学旅行	40

3	留学生交流支援	43
3.1	栃木県地域留学生交流推進協議会	43
3.2	交流支援事業	44
3.3	小・中・高等学校での国際交流	45
4	留学生の獲得施策	47
4.1	日本留学フェア	47
4.2	外国人学生への進学説明会	50
4.3	交換留学生のための大学院進学説明会	52
4.4	海外同窓会のための意見交換（ベトナム／台湾）	53
5	日本人学生の海外派遣留学の推進・支援	55
5.1	海外留学説明会	55
5.2	国際インターンシップ	56
5.3	海外渡航前危機管理オリエンテーション	58
6	各種協議会等への参加	60
6.1	平成 27 年度日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議	60
6.2	平成 27 年度全国国立大学法人留学生センター長及び留学生課長等合同会議	60
6.3	平成 27 年度国立大学法人等国際企画担当責任者連絡協議会	61
6.4	平成 27 年度 第 2 回国立大学法人留学生指導研究協議会 兼 第 44 回大阪大学留学生教育・支援協議会	61

Ⅲ 教員個人活動実績

横田 信三	65
梅木由美子	70
吉田 一彦	72
戚 傑	75
鎌田美千子	79
湯本 浩之	83

Ⅳ 資 料

1	留学生在籍状況	89
2	国際交流協定校との受入・派遣状況一覧	90
3	留学生・国際交流センターの発行物	93

<センター長挨拶>



留学生・国際交流センター長 横田 信三

宇都宮大学「留学生教育研究論集第7号／留学生・国際交流センター年報2015年度」が完成しましたので、お届け致します。今年度は、宇都宮大学の国際交流を推進する、次に挙げる大きな出来事がありました。

大学が主催する英語研修が、9月5日から9月29日まで米国・南イリノイ大学で、そして8月31日から9月14日までオーストラリア・サザンクロス大学で実施され、それぞれ21名及び20名の学生が参加しました。センターは、準備段階から当研修をサポート致しました。

昨年度に引き続き、9月末に農学部教員と大学院生が米国パデュー大学を訪問し、また、2016年3月13日から3月17日まで、パデュー大学の教員6名が来訪し、ワークスタディを実施致しました。今回は、パデュー大学の教養学部の教員1名も来学し、また、本学国際学部の教員もワークスタディに参加しました。今後、本学国際学部とパデュー大学教養学部との学術交流の進展が期待されます。

ベトナムでの日本留学フェア（10月31日ハノイ、11月1日ホーチミン）に参加し、本学の紹介及び本学への留学の勧誘等を行いました。また、フェアに先立ち、ダナン科学技術大学を訪問し、本学との学術協定締結等に関して関係者と協議致しました。更に、現地で本学の元留学生とも懇談し、ベトナムでの同窓会ネットワーク確立の一助となりました。

トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラムの全国版に、本学から二人目の学生が選出されました。また、「地域人材コース」の「とちぎグローバル人材育成プログラム（上級コース）」に本学の学生5名が選出され、7月23日に、文部科学省及び栃木県からの来賓をお招きして、本学で壮行会を開催致しました。これらのプログラムを通して、本学のグローバル人材育成が益々進展して行くことが期待されます。

上記以外にも、様々な事業をセンターとして実施致しました。本教育研究論集・年報を御覧頂き、当センターの日頃の取組や活動を御理解頂ければ幸甚です。

2016年3月 吉日

宇都宮大学
留学生教育研究論集
第7号

日本語を第二言語とする子どもたちのためのリライト教材作成に関する方法論的検討

—日常会話レベルから教科書レベルへの橋渡し—

鎌田 美千子

<キーワード>

文章理解、言い換え、書き換え、パラフレーズ、年少者日本語教育

1. はじめに

日本語を第二言語とする子どもたちが在籍する学校では、教科学習での読み書きの難しさを抱えるケースが少なくない。そのため、日常会話で使われているような単語（以下、「日常語」と表す）を用いたり教材教具を活用したりしながら、子どもの学びをサポートしている。こうした中で、教科書のわかりにくい表現を別の表現に言い換えること、また書き換えることがよく行われている。だが、これまでどちらかと言うと、取り出し指導¹などでの口頭によるものが主流であった。年齢が上がるにつれて文章を通して知識を獲得する機会が増えていくことを考えると、いずれは口頭による個別のサポートがなくても読めるようになっていくことが望ましい。特に教科書は、教科学習に最も密接な位置づけにある。教科書が読める程度の読解力を育成していくことは、重要な課題である²。

この課題に対する一つのアプローチとして、リライト教材が挙げられる。光元・岡本（2012）によると、リライト教材とは、「発達段階に応じた思考ができるように、子どもの日本語力に対応させて、教科書本文を書き換えた教材」（p.3）を指す。市販されているものは少なく、多くの場合、指導側（ボランティアを含む）によって作成されている。全般的に、個々の単語の難易に注意が払われ、文章全体を短くする傾向が見られる。同時に、文章を短くすると、本来の情報が自ずと単純化するといったことが生じやすい。筆者がこれまで取り組んできた年少者日本語教育に関する大学での授業や地域でのワークショップにおいても同様の問題が見られる。リライト教材作成には、こうした難しさがあるが、どのように書き換えるかといった文章のあり方自体に焦点を当てた論考は、現在のところ、まだ見られない。日常会話レベルの日本語から教科書レベルの日本語への橋渡しを目指すには、使用される表現を含め、教科書及びリライトの文章自体にも目を向ける必要がある。

一方で、学齢期の子どもの第二言語習得においては、日常会話が比較的早くできるようになることもあり、教科書及びリライトに用いられる日常語に関しては、これまであまり留意されてこなかったように思われる。後述するように、「リライト＝平易な表現で書き換えること」と捉えてしまうと気づきにくい問題が内在している。そこで本稿では、日常語に焦点を当てて、小・中学校教員や指導補助者、大学生ボランティアがリライト教材を作成することを念頭に、作成上の留意点を整理し、「説明を聞けばわかるが教科書の文章の理解が難しい」といった子どもを主な読み手として想定したリライト方法を提案することを目的とする³。普段からリライトを試みている教育関係者がこれまで経験的に身につけてきたことをふり返って確認できるように、教科書の文章やリライト例、関連研究を示しながら論じていく。

なお、本稿では、もとの文章全体を書き換えること及び書き換えた文章全体を「リライト」と呼び、書き

¹ 取り出し指導とは、日本語指導を必要とする児童生徒が各自の日本語能力に応じて在籍学級から日本語指導教室に通級し、日本語指導及び教科指導を受ける指導形態のことをいう。

² 初期段階として母語を活用した指導方法を提示した岡崎（2004）では、教科学習のための読解指導が不足していることが指摘されている。

³ 本稿は、主に小・中学校教員や指導補助者、大学生ボランティアを対象に2015年8月から11月にかけて四地域で実施したワークショップ「ことばを言い換えるために知っておきたい三つのこと—教科書のリライトを例に—」を筆者が構想する段階で方法論的枠組みとして検討した事項の一部を取り上げて論じたものである。

換える過程の中で部分的に言い換える（書き換える）こと及びその表現を「パラフレーズ」と呼ぶこととする。また、学習支援のためのリライト教材には母語によるものもあるが、本稿では、日本語によるものを中心に論じていく。

2. 日常語の問題—教科書の文章を例に—

日常語は、教科書レベルの日本語への橋渡しを考えるにあたって最も基本となる表現の一つであるが、教科書の中でどのように扱われているのか、以下に三つの例を示す。

例1は、小学校社会科教科書『新しい社会 5下』（東京書籍）の単元「5 わたしたちの生活と環境」に市民の話として提示されている文章の一部である。環境モデル都市づくり宣言をした水俣市の取り組みが述べられている。例1では、下線部①「お金になって」に注目する。

例1

水俣市のかたの話

地域にリサイクル委員がいて、ブロックで月番を決め、1時間ぐらいごみの収集場所で、ごみを出しに来た人とごみの分別を進めます。水俣のごみには価値があります。それは、ごみをリサイクルしてごみから資源をあつめ、①お金になって地域にもどってくるからです。このシステムを学びに、中学校や高校の修学旅行生が来るだけでなく、アジア各国からの研究生が来ます。

（『新しい社会 5下』東京書籍, 2012, p.112, 下線は筆者）

例1の下線部①「お金になって」の「お金」は、基本的な語であり、他の表現に言い換えることなく扱われる可能性が高い。下線部①の「お金」は、リサイクルによって利益が得られることを意味し、硬貨や紙幣への形態的な変化を意味するものではない。この文章では、捨てられたごみの中に再利用できる資源が含まれていること、再利用できる資源が買い取られて利益が出ることは直接書かれていないが、これらのことをふまえながら読んでいくことによって下線部①「お金になって」の意味が明確になっていく。逆に、これらのことを想起できなければ、リサイクルといった話題であるだけに、硬貨や紙幣といった別の意味に読み誤ることも考えられる。

例2は、小学校理科教科書『わくわく理科5』（啓林館）の巻末に掲載されている「地いき資料集—わたしたちの地いきの自然—」で日本各地の自然と人々のくらしがそれぞれ小さな写真とともに一、二文で短く紹介されている中の一つである。例2は、福井県福井市の「消雪そうち」について述べた一文である。「消雪そうち」とは、車道の中央部に設置されている装置のことで、路面と地下をつないだパイプを通して地下水を汲み上げ、積雪時にその水を路面に流して融雪するしくみになっている。例2では、下線部②「安全に」に注目する。

例2

雪に備える〈消雪そうち〉

福井県福井市

雪国では、②安全に道路が使えるように、最も高くなった中央部から地下水をまき、雪をとかしながら両側へと流していく消雪そうちがついた道路がある。

（『わくわく理科5』啓林館, 2010, p.136, 下線は筆者）

通常の道路状況で「安全に」と言えば、スピードを抑えて運転すること、車の前方や後方を確認すること、



車間距離をとることなどが挙げられるのに対し、例2の下線部②の「安全に」には、積雪した路面を滑らないように走行（歩行）することが含意されている。例2では、冬に道路が凍結すること、また路面が滑りやすく車の事故が増えることに関しては触れられておらず、例1と同様に、文章に直接書かれていないこれらのことをふまえながら読んでいくことによって、例2の下線部②の「安全に」の意味が明確になっていく。

日常語の問題は、ある表現を別の表現に言い換える場合にも見られる。例3は、中学校社会科教科書『新しい社会 公民』（東京書籍）の単元「わたしたちの生活と現代社会」のコラム⁴として提示されている文章の一部である。村独自の子育て支援により平均出生率を上げている長野県下條村の取り組みについて述べられている。例3では、下線部③「意識改革」に注目する。

例3

下條村の子育て支援

長野県下條村は、天竜川のはとりに位置する人口約4000人の村です。全国の間部部の市町村が少子化になやまされる中であって、下條村の2008年から2012年の平均出生率は1.86に上ります。2011年の全国平均の出生率が1.39であったのに比べると、全国的にも出生率が高いことがわかります。その背景には、村独自の子育て支援策があります。（中略）支援策には多くの費用がかかります。そこで、村の支出をおさえるために、村の職員の③意識改革で公共サービスの低下を防ぐ一方、職員の人員削減などに取り組んでいます。また、生活道路の整備などの一部のサービスでは、住民や地域の力を積極的に活用するなど、村民参加の村づくりを進めています。

（『新しい社会 公民』東京書籍, 2014, p.13, 下線は筆者）

下線部③「意識改革」の「意識」及び「改革」は抽象度の高い単語であることから、リライトでは別の表現で示されることが見込まれる。例えば「考え方を変える」と言い換えることができるが、「考え方」にしても「変える」にしても、中学生の語彙としては友人との会話などにも出てくるような、日常に近い語と見なせる一方で、このように単語の難易度を下げただけでは、具体的にどのようなことを意味しているのかといった理解にまでは及ばない可能性があると言指される。

以上、見てきたように、これらの事例からは、単に日常語であれば理解できるわけではないということがわかる。個々の単語以外からもパラフレーズの方法を考える必要がある。では、どのようにリライトすればよいのだろうか。教科書の文章は日本で生まれ育った児童生徒を想定して書かれていることから、背景知識の不足に配慮することが一層重要になってくる。柴崎（2006）によると、背景知識とは、「テキストの外にありながらテキストに関係のある知識で、テキストを理解するのに必要な知識」（p.38）のことである⁵。例1及び例2の説明で言えば、文面に直接書かれていなくても想起されるとして挙げた事柄がこれにあたる。次章の3. では、この背景知識をいかに補うかについて、まず3.1で口頭によるサポートがある場合とない場合での扱い方の違いについて指摘した後、次に3.2で口頭によるサポートがない場合のリライトを作成する際の留意点とともに、例1及び例2のリライト例を示す⁶。

⁴「コラム」とは、教科書本文で中心的な学習項目が提示された後に本文とは別枠で発展的・応用的な話題として掲載されている文章を指す。深谷（2001）によると、社会科教科書は、主に文字による情報と図表・写真等による情報に大別され、文字による情報は、本文、コラム、資料、見出し、学習目標、人物のセリフなどに分類される。

⁵ここで「テキスト」とは、教科書のことを意味するのではなく、意味のまとまりがある文及び文章のことを指す。

⁶例3のリライト例は、抽象度の調整の観点から考察した鎌田（2015）に既に掲載しているため、略す。

3. 背景知識の不足への配慮

3.1 口頭によるサポートがある場合とない場合

背景知識の不足に配慮することは、日本語を第二言語とする子どもたちへの学習支援全般において重視されており、齋藤（2005）及び佐藤他（2005）にも示されているように、具体物の利用、直接体験などの口頭でのサポートがなされている。取り出し指導でリライト教材を活用した場合においても同様に口頭によるサポートを軸とした実践方法が展開されている。例えば松田他（2009）では、小学2年生児童1名を対象にした取り出し指導で「ペープサート（紙に描いたありの絵を棒で動かすようにしたもの）」（p.151）を用いている。光元（2014）では、小学6年生児童3名を対象にした授業で、「場面絵（作品の場面を描いた絵）」（p.28）を用いている。このような教育実践に共通することは、指導側とのことばのやり取りを通して理解を促している点である。

年少者日本語教育においてことばのやり取りを基底とすることの重要性は、スキヤフォールディング（scaffolding）⁷の観点からも強調してしかるべきである一方で、「読む」ということを中心に据えて考えると、上述したような読み方は、本来の「読む」という言語行動とは性質が異なる。第二言語としての日本語の読解教育について論じた宮谷（2005）は、何らかの目的があるから「読む」のであり、教室活動として背景知識を活性化させることは、「本当の意味での『読む』活動には不要」（p. 171）とした上で、授業中にウォーミングアップとして行われる教師からの問いかけを疑問視している。同様に、文章理解研究の見地から教育への視座を提示した Kintsch et al.（2012）も否定的な立場を取っている。長年にわたる研究に基づいて、教師からの質問を通して読解上の問題点を修正しながら読んでいく方法では、文章の意味を首尾一貫したものとして表象することができず、読んだ情報を自身の知識として組み込むことができないことを指摘している。このような観点から「読む」といった面をより重視するならば、口頭でのサポートを前提とするリライト教材と、口頭によるサポートを前提としないリライト教材の両者を別のものとして捉え、取り出し指導期間後の教材の一つとして後者の充実を図っていくことが肝要である。だが、リライトに関するこれまでの手引書では、前者を想定しているため、現在のところ、後者の作成方法に関して共通の指針が示されておらず、2. に述べたような日常語に留意すべきことにも、またそれらをリライトの中でどのように扱っていくかにも触れられていない。このような状況をふまえ、次の3.2では、まず文章理解のプロセスに関連づけながら、既存の作成方法では対応できないことを指摘した後、後者の作成方法として背景知識に関係する記述をリライトに含めるといった方向性とリライト例を提示する。

3.2 短くすることからの転換

認知心理学分野の言語理解に関する多くの文献でも示されているように⁸、文章理解には、次の二つの認知過程が関係している。一つは、ボトムアップ処理と呼ばれているものである。もう一つは、トップダウン処理と呼ばれているものである。前者は、一字一字の読みから単語を認識し、さらに個々の単語、句、文の意味へと理解していく過程である。後者は、話題や文章構造などの文章全体に関わる知識を用いて展開を予測したり文字として書かれていないことを推論したりしながら理解していく過程である。Stanovich（1980）によれば、文章理解には、これら二つの言語処理のうちどちらか一方ではなく、両者が相互に関連する。つまり、2. に挙げた例1の下線部①「お金になって」や例2の下線部②「安全に」の意味は、ボトムアップ処理とトップダウン処理の双方によって特定されていくこととなる。第二言語としての日本語の読みを支援していく際にもボトムアップ処理とトップダウン処理の双方に留意し、個々の単語の難易にとどまらない調整が必要で

⁷ 学習者が独力ではできなかったことをできるようにするための学習支援上の手助けを意味し、「足場がけ」「足場づくり」と訳される。その実践及び意義に関しては、ハモンド（2009）が詳しい。

⁸ 例えば阿部他（1994）、柏崎（2002）、岸（2004）などがある。



あると言える⁹。

一方で、口頭によるサポートがある場合のリライトでは、ボトムアップ処理に関する調整がほとんどであり、トップダウン処理に関する諸要素に関しては、これまであまり問題にされてこなかった。例えば、リライトの代表的な市販教材である光元・岡本（2012）では、文体、単文・複文、使用語彙、キーワード、漢字、複合動詞、受け身・使役表現、連体修飾表現、接続表現などに着目したパラフレーズ方法が示されている¹⁰。また、一文の長さは「五文節程度」（p.19）とされているように、全般的に文を短くする傾向がある。いずれもボトムアップ処理に対応するものである。だが、文を短くすれば、第二言語による読みへの抵抗感を軽減できる反面、文字情報が減ることから、話題についてよく知らない、かえってわかりにくくなる。口頭によるサポートがあるからこそ可能なリライト方法であると言える。

したがって、口頭によるサポートを前提とせずに自律した読みを基底とするリライトでは、文及び文章を短くするのではなく、むしろ情報を加えていくことが考えられる。例4及び例5に、話題に関する情報を加えたリライトを例示する¹¹。例4は、2. の例1のリライト例である。例5は、2. の例2のリライト例である。「説明を聞けばわかるが教科書の文章の理解が難しい」といった子どもを主な読み手として想定している。

例4

みなまたし はなし 水俣市のかたの話

みなまたし ちいき いいん
水俣市では、地域にリサイクル委員がいます。リサイクル委員は、まいつき とうばん きめま す。当番は、ごみをあつめ るばしょ で、リサイクルできるごみとリサイクルできないごみにわ けま す。ごみをだしにきたひとといっしょに分けま す。1時間ぐらいかかりま す。

みなまたし たいせつ
水俣市では、ごみを大切にしています。ごみからあつめた資源が売れるからで す。④例え ば 缶ジュースの缶をあつめま す。缶は、アルミでできていま す。アルミは、じどうしゃ のぶひん つか かん あつめ、リサイクルのかいしゃ に売ったあ と、そのお金がかね みなまたしにもどってきま す。

みなまたし ほか けん ちゅうがくせい こうこうせい けんがく き
水俣市のリサイクルは、とてもよくできていま す。他の県の中 学 生 や 高 校 生 が 見 学 に 来 ま す。アジ アのいろいろな国の人たちもみなまたし にも来 て、このリサイクルについて学んでいま す。

例5

ゆき そな しょうせつ 雪に備える〈消雪そうち〉

ふくいけんふくいし 福井県福井市

ゆき おお まち ふゆ どうろ
④雪が多い町では、冬に道路がこおります。雪の道路は、すべるので、車の事故が増えま す。福井県福井市では、雪の道路で車がすべらないように、道路の真ん中に「消雪そうち」がついていま す。「消雪そうち」は、地下の水を道路に流す機械で す。道路は、真ん中が高くなつていま す。道路の真ん中にある「消雪そうち」から地下の水がみず で、みず しょうせつ「消雪そうち」から出た水は、道路の真ん中からりょう はじへ流れなが ら、道路の雪をとかしま す。⑥地下の水は、道路よりもおんど たか しょうせつ「消雪そうち」から出た水は、道路の真ん中からりょう はじへ流れなが ら、道路の雪をとかしま す。

⁹ 同様の見解を示している論考に石黒（2013）、鎌田（2015）があるが、いずれにおいても日常語のパラフレーズ方法については、検討されていない。国語教科書の説明文を例に背景知識の重要性について論じた石黒（2013）は、教科書の文章の全体構造に焦点を当てており、リライト方法に関しては言及していない。日本語を第二言語とする子どもへの学習支援におけるリライトについて論じた鎌田（2015）は、抽象から具象への三つの段階を想定したパラフレーズ方法を提示しているが、考察の対象が和語動詞にとどまっている。

¹⁰ 光元・岡本（2012）は、国語科教科書を対象としているが、社会科・理科教科書を対象とする場合にも応用されている。

¹¹ リライトによって文章の難易度が下がったことを「日本語文章難易度判別システム」（<http://jreadability.net/>、2016年6月24日検索）を使用して確認した。例1の難易度は「中級後半」であり、例4の難易度は「中級前半」であった。例2の難易度は「上級後半」であり、例5の難易度は「中級後半」であった。

例4の下線部④も例5の下線部⑤及び⑥も、もとの文章に文字として書かれている内容のパラフレーズではない。例4の下線部④では、リサイクルに関連する身近な例を挙げて補足している。例5の下線部⑤では、雪国での道路状況について補足している。同じく例5の下線部⑥では、地下水で路上の雪がとけることを補足している。例4及び例5がこれまでのリライト方法と大きく異なるのは、表現上のパラフレーズにとどまらず、関連する情報を加えている点である。このように背景知識となる内容をリライト教材に文字を介して含めれば、確かにその分、長くなり、読む量が増える。しかし、読む量が増えたとしても、それぞれの話題に関係する情報を加えることによってトップダウン処理が支えられ、理解を促すことができると考えられる。特に社会科及び理科の教科書の文章は、国語教科書の文章に比べて短いという特徴とともに、日本で生まれ育った児童生徒を想定して書かれているような記述が多く見られることから、リライト方法をこのような方向性で進めていくことが必要ではないだろうか。

4. 社会科及び理科教科書のリライトにあたって—今後の検討課題—

以上、日常語に着目してリライト方法について考察した。リライト作成上の留意点をまとめると、(1)単語の意味理解に背景知識が関わること、(2)口頭によるサポートがある場合とない場合とではリライトにおける背景知識の扱いが異なること、(3)「読む」ことを重視したリライト教材では短い文章にすることが逆にわかりにくくなる可能性があることを指摘した。これらの点をふまえて、口頭によるサポートがない場合のリライト方法として背景知識を取り込むことを提案した。リライトに加える情報として具体的にどのような内容を取り込んでいくかについては、今後、さらに以下の観点から検討していくことが本研究の課題である。

第一に、知識獲得といった観点からの検討である。リライトでは、読み手となる子どもが理解できる文章か否かに注意が向きやすいが、社会科及び理科教科書を対象とする場合には、知識として役立つかどうかも重要な視点となる。Kintsch (1994) は、「テキストの学習 (learning of text)」と「テキストからの学習 (learning from text)」の二つの概念を提示している。「テキストの学習」とは、文章を読み取ることを指す。これに対し、「テキストからの学習」とは、文章を読んで理解し、その内容を応用できるような知識を獲得することを指す。小嶋(1996)は、これら二つは連続的で明確に分けることはできないとした上で、前者は国語科の読みと対応し、後者は社会科及び理科の読みと対応すると説明している。この捉え方は、リライトにおいてもあてはまるのではないだろうか。つまり、単に読みやすさのみを追求するのではないということである。今後、各単元の学習活動と関連づけて、様々な背景知識のうち、どのような情報をリライトに含めて、どのような情報をあえて含めないのかといった分析を行った上で、新たな手引書を作成することが課題である。

第二に、作成側へのサポートといった観点からの検討である。社会科及び理科の教科内容をふまえたリライト教材の作成は、実際に教科指導に関わったことがない大学生ボランティアにとって容易ではないことから、ワークショップなどを通して、例えば各単元の学習活動を俯瞰できる補助資料を提供したり、大学生ボランティアと教員が協働できるような場を設けたりするなど、取り組みやすい環境を整えていくことが同時に必要であろう¹²。教科書の文章を複眼的な視点から捉えることができるような異文化理解の場や、子どもの言語発達について学べるような機会を今後も提供しながら、作成側へのサポートを整備していくことが課題である。

第三に、実際の子どもたちの視点を生かした検討である。子ども一人ひとりが文章を通して感じた率直な思いや簡単なエピソードを語る中にも、リライトにどのような背景知識を取り込むかを考えるヒントが数多

¹²注3で述べたワークショップでは、参加した大学生ボランティアから「実際に教えている方の意見を聞くことは貴重な体験で、今まで知らなかったことを数多く得ることができた」「実際に日本語教育に携わっている方々と意見交換ができ、とても貴重な経験になった」といったコメントが寄せられた。



く隠されている。一人ひとりの声に耳を傾けることは、リライト作成においても重要な点である。子どもたちの日常から教科学習の文脈へとつなげていく上で、子どもの興味・関心を引き出すような工夫を試みていきたい。

5. おわりに

以上、本稿では、日常語に焦点を当てて、日本語を第二言語とする子どもたちを対象としたリライト教材を作成する際の留意点を背景知識の面から考察した。加えて、社会科及び理科教科書のリライトにあたっての発展的な課題について述べた。今後、上述した課題に取り組むとともに、本稿で示したリライト例の有効性を実証していく予定である。これらのことを通して、日本語を第二言語とする子どもたちへの学習支援方法の一層の充実を図っていきたい。

謝辞

本稿で提示したリライト方法に関して、ワークショップ参加者の方々から大変貴重なご意見とご質問をいただきましたことに深く感謝申し上げます。また、有益なご助言をいただきました査読者の方々及び山形大学大学院理工学研究科准教授の仁科浩美先生に心よりお礼申し上げます。

本研究は、JSPS 科研費基盤研究 (C) 課題番号 25370575 及び課題番号 16K02796 の研究成果の一部であることを記し、謝意を表します。

参考文献

- 阿部純一・桃内佳雄・金子康朗・李光五 (1994) 『人間の言語情報処理—言語理解の認知科学—』サイエンス社
- 石黒圭 (2013) 「『やさしい日本語』と文章の理解—背景知識の重要性—」庵功雄・イヨンスク・森篤嗣編 『『やさしい日本語』は何を目指すか—多文化共生社会を実現するために—』ココ出版, pp.141-155.
- 岡崎敏雄 (2004) 「外国人年少者日本語読解指導方法論—内発的発展モデル—」『筑波大学地域研究』23, pp.119-132.
- 柏崎秀子 (2002) 「言語心理学エッセンス」海保博之・柏崎秀子編 『日本語教育のための心理学』新曜社, pp.61-95.
- 鎌田美千子 (2015) 「JSL 児童生徒への教科学習支援を目的としたリライト試案—プロフィシェンシーの観点から和語動詞に着目して—」『第 10 回 OPI 国際シンポジウム 基調講演・パネルディスカッション・研究発表予稿論集』, pp.111-114.
- 岸学 (2004) 『説明文理解の心理学』北大路書房
- 小嶋恵子 (1996) 「テキストからの学習」波多野誼余夫編 『認知心理学 5 学習と発達』東京大学出版会, pp.181-202.
- 齋藤ひろみ (2005) 『外国人児童の「教科と日本語」シリーズ 小学校「JSL 社会科」の授業作り』スリーエーネットワーク
- 佐藤郡衛・齋藤ひろみ・高木光太郎 (2005) 『外国人児童の「教科と日本語」シリーズ 小学校 JSL カリキュラム「解説」』スリーエーネットワーク
- 柴崎秀子 (2006) 『第二言語テキスト理解と読み手の知識』風間書房
- ハモンド, ジェニファー (2009) 「スクヤフォールディングの実践とその意味—在籍学級の ESL 生徒の学びをどう支えるか—」川上郁雄・石井恵理子・池上摩希子・齋藤ひろみ・野山広編 『「移動する子どもたち」のことばの教育を想像する—ESL 教育と JSL 教育の共振—』ココ出版, pp.8-42.

- 深谷優子 (2001) 「学習を支える多様なテキスト」, 大村彰道監修, 秋田喜代美・久野雅樹編『文章理解の心理学—認知, 発達, 教育の広がりの中で—』北大路書房, pp.164-175.
- 松田文子・光元聰江・湯川順子 (2009) 「JSL の子どもが在籍学級の学習活動に積極的に参加するための工夫—リライト教材を用いた『日本語による学ぶ力』の育成—」『日本語教育』142, pp.145-155.
- 光元聰江 (2014) 「取り出し授業と在籍学級の授業とを結ぶ『教科書と共に使えるリライト教材』」『日本語教育』158, pp.19-35.
- 光元聰江・岡本淑明 (2012) 『外国人・特別支援 児童・生徒を教えるためのリライト教材 改訂版』ふくろ出版
- 宮谷敦美 (2005) 「読むための日本語教育文法」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版, pp.167-185.
- Kintsch, E., Caccamise, D., & Kintsch, W., 森島泰則訳 (2012) 「文章理解理論の読解教育への応用」福田由紀編『言語心理学入門—言語力を育てる—』培風館, pp.1-8.
- Kintsch, W. (1994). Text comprehension, memory, and learning. *American Psychologist*, 49, pp.294-303.
- Stanovich, K. E. (1980). Toward an interactive-compensatory model of individual differences in the development of reading fluency. *Reading Research Quarterly*, 16, pp.32-71.

A Methodological Study of Creating Rewritten Teaching Materials for Students of Japanese as a Second Language: Focusing on Paraphrasing to Bridge the Gap Conversation- and Textbook-level Learning

Michiko Kamada

Keywords: sentence comprehension, paraphrasing, rewriting, Japanese language education for students of Japanese as a second language

Abstract

Using rewritten teaching material is one of the ways to support students of Japanese as a second language in Japanese schools. The purpose of this study is to discuss the issues relating to using rewritten teaching material from the methodology perspective focusing on everyday words. This paper pointed out that (1) even everyday words should be treated carefully while paraphrasing, (2) it must be possible to include background knowledge in rewritten teaching material because it supports comprehension based on top-down processing, and (3) it is essential to rewrite textbooks of social studies and science aiming to achieve not only sentence comprehension but also knowledge acquisition. A further study is necessary for a more extensive consideration based on many other perspectives, such as social and scientific thinking, when creating rewritten teaching materials.

(2016年3月31日受稿、2016年6月24日受理)

宇都宮大学留学生教育研究論集 執筆要領

「宇都宮大学留学生教育研究論集（以下、「論集」とする）」に投稿しようとする者は、以下の「執筆要領」に従うものとする。

1. 投稿する研究論文・報告・研究ノート（以下、「論文等」とする）の判型は、A4版横書きとする。
2. 「論文等」に使用する言語は日本語あるいは英語とする。
3. 「論文等」の文字数および頁数は、1頁あたり全角40字×35行とし、15頁以内とする。ただし、本文のほか、表題、執筆者名、図表、脚注、参考・引用文献、要約などもすべてこの制限頁数以内におさめるものとする。
4. 「論文等」の書体（書体）および文字サイズは、以下の通りとする。
 - ①表題、執筆者名、見出し、図表等のタイトルは、ゴシック体とする。
 - ②そのほかの本文、脚注、参考・引用文献は明朝体とする。
 - ③脚注のフォントは、9ポイントとする。それ以外の部分のフォントは10.5ポイントとする。
5. 「論文等」の原稿は、以下の体裁を取る。
 - ①表題、執筆者名、キーワード（5語程度）、本文、参考・引用文献、要約の順に記述する。
 - ②表題および執筆者名のスペースとして、8行を確保すること。したがって、1頁目の本文の書き出しは9行目からとなる。
 - ③原則として、原稿の見出しに「章・節・項」は用いず、大見出しは「1. 2. 3. …（数字・ピリオドは全角）」、中見出しは「1.1 1.2 1.3 …（数字・ピリオドは半角）」、小見出しは「1.1.1 1.1.2 1.1.3…（数字・ピリオドは半角）」とする。なお、項目を並記する場合は「(1) (2) (3) …」とする。
 - ④句点は「、」、読点は「。」とする。
 - ⑤文体は「である調」とし、原則として常用漢字、新仮名づかいを用いる。英数字（アラビア数字）については、1桁は全角文字、2桁以上は半角文字を用いる。
 - ⑥表記を統一する。（例：「並びに／ならびに」「葉書／ハガキ」「コンピューター／コンピュータ」等）
 - ⑦図表は本文中に埋め込み、図および表には、それぞれ通し番号を表示する。
 - ⑧注釈は脚注とし、該当箇所の右肩に括弧なしの洋数字（123…）で通し番号を表示する。
 - ⑨参考・引用文献の書誌情報については、本文中に引用箇所を明示した上で、原稿末尾に著者名、発表年、書名・題名、巻・号、ページ、発行所を明記する。
 - ⑩ウェブサイトから引用する際には、作成者、URL、参照年月日を明示する。
 - ⑪要約は以下の要領で作成する。

和文の場合：英語の表題、ローマ字著者名、英文要約（300語以内）、英語キーワード（5語程度）
英文の場合：日本語の表題、日本語著者名、和文要約（800字以内）、日本語キーワード（5語程度）
 - ⑫原稿には通し番号を記す。
6. 査読の公正さを期するために、以下のことに留意する。
 - ①「研究論文」の中には「拙稿」や「拙著」など、投稿者名が判明するような表現、または指導教員や研究協力者などに対する謝辞を避ける。ただし、謝辞については、査読後の編集段階で追記を認める場合がある。
 - ②「研究論文」の投稿原稿には、所属および執筆者名を記載しない。

以上

I 留学生・国際交流センターの概要



1 沿革・使命

宇都宮大学に在籍する外国人留学生は、正規生（学部学生及び大学院学生）及び非正規生（交換留学生、研究生及び日本語・日本文化研修留学生等）合わせて、平成 27（2015）年 10 月現在では、世界 30 カ国から 277 名の留学生が学んでいる。

留学生・国際交流センター（以下、「センター」という。）は、当初外国人留学生に対し、必要な日本語・日本事情教育及び修学・生活上の指導助言を行うとともに、留学生と地域との交流の推進や海外留学を希望する学生に対する指導助言を行うことを目的として、平成 14（2002）年 4 月に留学生センターとして設置された。

その後、平成 24（2012）年 4 月にセンターへ改組し、それまでの「日本語教育運営部門」と「留学生指導・相談部門」の 2 部門に、「国際交流推進部門」を新たな部門として設置して 3 部門とし、国際交流のより積極的で具体的な業務展開を推進することとした。

センターには、センター長、専任教員 5 名、また事務体制として学務部留学生・国際交流課が配置され、教育、相談指導、交流事業等の業務に当たっている。主な内容は次のとおりである。

(1) 日本語の授業

センターでは、研究・交流の場や日常生活の中で円滑な意思疎通が行えるように、留学生にさまざまな学習の機会を用意している。日本語の授業は、初級から上級までをカバーし、日本語のコミュニケーション技能と、日本語で行われる学術・研究活動での表現力の向上を目指すものである。現在、全留学生を対象としたカリキュラムとともに、学部留学生や国費留学生（研究留学生、教員研修留学生、日本語・日本文化研修留学生、日韓共同理工系学部留学生）を対象とした授業を行っている。

(2) 相談指導

相談指導担当の教員が、修学上や生活の中で生じた問題について、留学生と話し合い、適切な助言を与えている。また、留学生、チューター指導教員の間で連携をとることにより、必要なときに適切な支援ができるシステムづくりを目指している。

(3) 交流事業

センターは、留学生と地域社会との充実した交流プログラムづくりに努めている。また、地元の国際交流団体やボランティアグループと連携することにより、交流の機会を少しでも増やそうと、地域住民に呼びかけてホームステイ体験事業を行っている。同時に多彩な文化交流活動を通じて、留学生と日本人学生の相互理解を深め異なる文化をお互いに尊敬する態度を養っている。

(4) 調査・研究

日本語教育部門では日本語の構造、教授法、教材開発、異文化コミュニケーションなどのテーマ、また、留学生指導・相談部門では留学生の相談指導に関わる問題、そして、国際交流推進部門では、日本人学生の派遣前オリエンテーション、国際的な文化交流などのテーマについて調査・研究を行っている。

(5) 留学生・国際交流課

留学生・国際交流課は、学生及び教員の国際交流に関する様々な業務を行うほか、「センター」の事務も担当し、留学生が安心して勉学に専念できるよう、以下のような修学上・生活上の支援業務を行っている。

- ・奨学金に関すること
- ・国際交流会館の入退去に関すること
- ・海外留学に関すること
- ・留学生のチューターに関すること
- ・地域交流事業についての情報提供に関すること

2 組織

(平成 28 年 3 月 1 日)

留学生・国際交流センター教員	
留学生・国際交流センター長 (農学部教授兼任)	横田 信三
教授(副センター長)	梅木 由美子
教授	吉田 一彦
准教授	戚 傑
准教授	鎌田 美千子
准教授	湯本 浩之
国際交流会館主事 (国際学部教授兼任)	松金 公正

学務部留学生・国際交流課	
課長	阿部 好子
課長補佐 (兼国際交流企画係長)	飯島 賢道
留学生係長	勝瀬 京
係員	原 裕美
係員	館 智恵子
派遣職員	黒沢 則恵
事務補佐員	阿部 ひかり
事務補佐員	寺門 喜永
国際インターンシップ事務室	
コーディネーター	松井 貞
事務補佐員	古川 容子

[非常勤講師]

石川 美和 八重島 炎 木林 理恵 森口 岳 綿貫 雅一 小林 敏雄

3 年間行事

<4月>

- 7日(火) 国際交流会館入居オリエンテーション/防犯・安全指導
- 8日(水) 4月来日留学生(学部留学生を除く)オリエンテーション
- 10日(金) 宇都宮大学におけるグローバル教育についての説明会
- 14日(火) 4月来日留学生生活上の留意事項説明会/4月来日留学生歓迎会
- 15日(水) 学部1年生及び編入留学生オリエンテーション
- 16日(木) 海外英語研修説明会
- 16日(木) 平成27年度留学生支援事業に関する担当者会議(主催:栃木県国際交流協会)

<5月>

- 13日(水) 平成26年度春期国際インターンシップ報告会及び平成27年度夏期説明会
- 15日(金)~17日(日) ホームステイウィークエンド in 那珂川2015(春:田植え)
(主催:那珂川町教育委員会、那珂川国際交流事業企画運営委員会)
- 21日(木) アメリカ・ノースダコタ大学学長他5名来訪
- 25日(月)~26日(火) ガーナ大学農学部長来訪
- 30日(土) 平成27年度新規外国人留学生のためのガイダンス及び懇親パーティー
(主催:栃木県国際交流協会、栃木県地域留学生交流推進協議会)

<6月>

- 1日(月) 中国・浙江師範大学副学長他5名来訪
- 9日(火) 平成27年度海外留学説明会
- 12日(金) アメリカ・トライン大学事務担当者来学
- 24日(水) 留学生合同企業説明会(主催:栃木労働局外国人留学生就職支援協議会)



< 7月 >

- 7日(火) 国際交流(七夕)の集い(主催:栃木経済校友会)
- 12日(日) 平成27年度外国人学生のための進学説明会(東京会場)
- 14日(火) 平成27年度外国人留学生工場見学会(主催:宇都宮市国際交流協会)
- 15日(水) 栃木県地域留学生交流推進協議会総会(主催:栃木県地域留学生交流推進協議会)
- 15日(水) 平成27年度留学生との交流会/感謝状贈呈式(主催:栃木県地域留学生交流推進協議会)
- 16日(木) 国際インターンシップオリエンテーション
- 16日(木) 平成27年度第1回海外留学渡航前危機管理オリエンテーション
- 17日(金)~20日(火) 日本留学フェア(台湾)/留学生OB・OGとの懇談会/協定校訪問
- 18日(土) 平成27年度外国人学生のための進学説明会(大阪会場)
- 22日(水)~24日(金) 中国・浙江工業大学来訪(学生20名、教員2名)
- 28日(火) 平成27年度交換留学生のための大学院進学説明会
- 28日(火) 平成27年度前期短期留学プログラム修了発表会
- 28日(火) 平成27年度前期留学生修了式及び懇談会
- 30日(木) 日本語・日本文化研修留学生発表会

< 8月 >

- 31日(月)~9月11日(金) 専門教育としての海外英語研修(オーストラリア・サザンクロス大学語学研修)

< 9月 >

- 3日(木)~4日(金) 外国人留学生見学旅行(鎌倉・富士山方面)
- 5日(土)~29日(火) EPUU留学(アメリカ・南イリノイ大学語学研修)
- 13日(日)~20日(日) アメリカ・パデュー大学及びヴァンセンズ大学訪問
- 15日(火)~23日(水) 国際インターンシップ先訪問・開拓(タイ、ベトナム、カンボジア)

< 10月 >

- 1日(水) 10月来日留学生オリエンテーション
- 5日(月) 日本語・日本文化研修留学生オリエンテーション
- 5日(月) 国際交流会館入居説明会
- 10日(土)~11日(日) ホームステイウィークエンド in 那珂川2015(秋:稲刈り)
(主催:那珂川町教育委員会、那珂川国際交流事業企画運営委員会)
- 13日(火) 10月来日留学生生活上の注意事項説明会
- 13日(火) 10月来日留学生歓迎会
- 21日(水) 留学生のための就活スタートセミナー(主催:栃木県労働局外国人留学生就職支援協議会)
- 23日(金) 日本留学フェア(宇都宮)
- 31日(土)~11月1日(日) 日本留学フェア(ベトナム)/留学生OB・OGとの懇談会/協定校訪問

< 11月 >

- 4日(水) 平成27年度国費(学部進学)留学生への大学院進学説明会(主催:大阪大学)

6日（金）～7日（土）平成27年度全国国立大学法人留学生センター長及び留学生課長等合同会議
（主催：琉球大学）

16日（月）平成27年度夏期国際インターンシップ報告会及び春期説明会

24日（火）交換留学フェア

< 12月 >

10日（木）留学生採用・活用促進セミナー&企業人事担当者と留学生の交流会
（主催：栃木県地域留学生交流推進協議会）

13日（日）～14日（月）日本留学フェア（タイ）／協定校・留学生OB在職大学訪問

17日（木）～18日（金）平成27年度国立大学法人等国際企画担当責任者連絡協議会（主催：香川大学）

21日（月）とちぎグローバル人材育成プログラム（基礎コース）採択学生向けオリエンテーション

< 1月 >

26日（火）国際交流会館退去説明会

< 2月 >

1日（月）平成27年度後期中級日本語短期プログラム修了発表会

10日（水）平成27年度第2回海外渡航前危機管理オリエンテーション

20日（土）～21日（日）平成27年度県内外国人留学生ホームステイ・プログラム
（主催：栃木県地域留学生交流推進協議会）

< 3月 >

8日（火）外国人留学生と地域交流団体等との交流会

13日（日）～17日（木）アメリカ・パデュー大学研究者6名来訪

17日（木）平成27年度留学生指導教員及び事務担当者研修会（主催：栃木県地域留学生交流推進協議会）

17日（木）栃木県地域留学生交流推進協議会運営委員会（主催：栃木県地域留学生交流推進協議会）

Ⅱ 留学生・国際交流センターの活動

留学生・国際交流センター年報
2015年度



1 教育・授業

1.1 留学生・国際交流センター開講授業

(1) 「初級日本語補習Ⅰ」「初級日本語補習Ⅱ」

留学生・国際交流センターでは、研究留学生、大学院生、交換留学生、教員研修留学生などを対象に初級および中級レベルの日本語の授業を行っている。初級レベルについては、平成26年度まで「初級日本語補講」という名称で前期、後期に開講してきたが、27年度から対象の学習者を未習者と既習者を分け、「初級日本語補習Ⅰ」「初級日本語補習Ⅱ」という名称で新たなスタートをした。どちらの補習も大学での勉学生活に必要な基本的日本語コミュニケーション能力を身につけることを目指している。

大学院生や研究留学生は所属する研究室や自身の研究活動が忙しくなると、なかなか日本語補習に出席できなくなり、途中で脱落してしまうこともあるが、今回受講の学生の多くは非常に勉強熱心で、最後まで意欲的に学んでいた。これは本人の努力や資質はもちろんだが、指導教員を始めとする所属先の研究室の方々の日本語学習に対する理解の深さが大いに関係していると思われる。

平成27年度に実施した補習は以下の通りである。

<前期>

「初級日本語補習Ⅰ」

期 間：4月20日～7月31日

開講日時：火曜日 8:50～10:20 木曜日・金曜日 10:30～12:00

主テキスト：スリーエーネットワーク『みんなの日本語初級Ⅰ 第2版』（1課-16課）

受講者：2名（大学院生1名 研究留学生1名）

講 師：石川 美和（留学生・国際交流センター非常勤講師）

梅木由美子（留学生・国際交流センター教員）

「初級日本語補習Ⅱ」

期 間：5月20日～7月29日

開講日時：水曜日 10:30～12:00

主テキスト：スリーエーネットワーク『みんなの日本語初級Ⅰ 第2版』（既習状況により適宜使用）

受講者：4名（大学院生2名 交換留学生2名）

講 師：アセリ スバゴジェヴァ（国際学研究科博士後期課程3年）

<後期>

「初級日本語補習Ⅰ」

期 間：10月6日～1月29日

開講日時：月曜日・火曜日・木曜日・金曜日 10:30～12:00 水曜日 12:50～14:20

主テキスト：スリーエーネットワーク『みんなの日本語初級Ⅰ 第2版』（1課-23課）

受講者：5名（研究留学生4名 交換留学生1名）

講 師：石川 美和（留学生・国際交流センター非常勤講師）

八重島 炎（留学生・国際交流センター非常勤講師）

北村 優子（留学生・国際交流センター講師）

梅木由美子（留学生・国際交流センター教員）

「初級日本語補習Ⅱ」

期 間：10月8日～2月8日

開講日時：月曜日・木曜日 8：50～10：20

主テキスト：月曜日（作文）特に決めず担当講師が用意

木曜日（文法）スリーエーネットワーク『みんなの日本語初級Ⅰ 第2版』（第12課-20課）

受講者：3名（大学院生1名 交換留学生2名）

講 師：八重島 炎（留学生・国際交流センター非常勤講師）

北村 優子（留学生・国際交流センター講師）

（梅木 記）

(2) 中級日本語短期留学プログラム

留学生センターでは、平成20年4月から、「宇都宮大学中級日本語短期留学プログラム」を実施してきている。本プログラムは、本学と交流協定を締結している海外の大学から派遣された留学生を対象とした、6ヶ月～12ヶ月間の留学プログラムで、このプログラムを通して日本語能力を上げるとともに、日本社会および日本文化について理解を深めることを目的にしている。

海外の交流協定提携校から本学に派遣された外国人留学生は、日本語能力が非常に限られており、その中には、中級日本語の授業を受講できるレベル（日本語検定試験3級くらいのレベルで、日常生活面においては、簡単な買い物ができ、自分で電車に乗られるくらいのレベル）の学生が多かった。これらの留学生は、学部で提供されている普通の日本人向けの授業を受講することは非常に困難である。これらの留学生のニーズに答えるため、留学生センターでは、検討を重ねた結果、平成20年度から、交流協定を結んでいる海外の大学からの留学生を対象とする「中級日本語短期プログラム」を実施することになった。平成27年度では、22名の留学生が本プログラムを修了した。

また、本年度はじめて、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度（協定受入）に、「大学間・部局間交流協定に基づく中級日本語短期留学プログラム」で申請し、17名の学生が採択された。

本プログラムの目的や平成27年度の実施要領等を以下に示す。

1) 目的

宇都宮大学（以下、本学という。）短期留学プログラムは、本学と交流協定を締結している海外の大学からの留学生を対象として受け入れ、本学における日本語教育、日本文化等の授業科目を提供するための教育プログラムである。この短期留学プログラムは、日本および日本文化に対するより良い理解者としてだけでなく国際社会で活躍できる人材を育成することを目的に、6ヶ月～12ヶ月にわたり、本学での日本語教育、日本文化体験および本学の学生・教職員との交流等を実施するであり、以下の通り要領を定める。

2) 対象者

本学短期留学プログラムに出願できる者は、以下の2つの要件をすべて満たしたものとする。なお、留学生・国際交流センター長が特別許可する者については、その限りではない。

- ①本学と学生交流協定を結んでいる外国の大学の正規課程に在籍している学部学生または大学院学生。
- ②渡日前に300時間程度の日本語教育を受けている者、あるいは日本語能力試験3級に合格している者。

3) 受入れ期間

原則として、10月からの1年間、または4月からの半年間とする。

4) 受入れ予定人数

10名～15名程度とする。

5) 修了要件

- ①一学期において、「短期留学プログラム」のコア日本語科目の中から3科目以上を履修すること。但し、学生の日本語能力によって、共通教育、または国際学部で開講する日本語科目を用いて替えることが出来る。
- ②一年間のコースには、年間10科目以上を履修し、且つ単位を取得すること。また、半年間のコースでは、5科目以上を履修し、且つ単位を取得すること。
- ③自主研究レポートを提出すること。

6) 自主研究：短期留学生特別演習 A・B

留学生は担当教員と相談した上で研究テーマを決める。更に、担当教員の指導のもと、研究成果をまとめたレポートを修了時に提出する。

7) 成績評価・単位認定

この教育プログラムの受講生に対して、履修した授業科目、成績評価および単位数を記載した成績書を発行する（ただし、留学センター開講科目については留学生センター長名で発行する）。本学の発行した成績書に基づき、留学生を派遣した大学において単位認定が行われる。但し、学位取得に関する単位として認定するか否かの判断は、留学生を派遣した大学に委ねる。

8) 平成 27 年度コア日本語科目

	科目の種類	科目名	単位	担当教員
前期	コア日本語科目	中級読解 A	1	石川
		中級作文 A	1	八重島
		中級作文 A	1	八重島
		中級聴解 A	1	戚
		漢字と漢字文化	1	戚
	演習科目（必修）	短期留学生特別演習 A	2	戚
後期	コア日本語科目	中級読解 B	1	八重島
		中級文法 B	1	八重島
		中級漢字	1	石川
		中級作文 B	1	石川
		中級聴解 B	1	戚
		中級会話 B	1	戚
		中級総合 I	1	木林
		中級総合 II	1	木林
	演習科目（必修）	短期留学生特別演習 B	2	戚

9) 平成 27 年度前期プログラム修了発表会

宇都宮大学留学生・国際交流センター「中級日本語短期留学プログラム」修了発表会
7月28日(火) 14:00～16:00 留学生センター国際交流学習室



開会の辞：横田センター長



修了発表風景

①開会の辞：横田 信三（留学生・国際交流センター長）

②発表題目

- a. 「村上春樹作品の中心的テーマ」…………… リサ・ディッセルホッフ（国際学部 交換留学生）
- b. 「日本の稲作文化」…………… 吳 芷函（国際学部 交換留学生）
- c. 「沖縄語・そろそろ消滅？」…………… Saskia Schulz（国際学部 交換留学生）
- d. 「チェコ・スロバキアを訪れる日本人観光客向けの観光サービス」
…………… Hlozkova Lenka（国際学部 交換留学生）
- e. 「歌舞伎に見る日本人の美学」…………… 羅 寶欣（国際学部 交換留学生）
- f. 「結婚風習とタブーに関する日中比較」…………… 蔡 麗莎（国際学部 交換留学生）
- g. 「NHK 交響楽団の経営に関する一考察」…………… 章 家綺（国際学部 交換留学生）
- h. 「日本の醤油食文化」…………… 歐 惠婷（国際学部 交換留学生）

③質疑応答

④総評：戚 傑（「中級日本語短期留学プログラム」コーディネーター）



修了発表会場風景

10) 平成 26 年度後期プログラム修了発表会

宇都宮大学留学生・国際交流センター「中級日本語短期留学プログラム」修了発表会

2月1日(月) 13:00～16:00 留学生センター国際交流学習室

①開会の辞：留学生・国際交流センター長 横田信三先生

②発表題目

- a. 「西尾維新の〈物語〉シリーズをベトナム語に翻訳するにあたって」
..... ゲエン ゴック・カイン (国際学部 交換留学生)
- b. 「日本のお風呂文化について」..... キム ヘヨン (国際学部 交換留学生)
- c. 「ココナッツミルクから作ったタイ料理とタイ文化」
..... ポンサッカチョン・ラウインダ (国際学部 交換留学生)
- d. 「『ラブライブ! School Idol Project』が人気である理由」..... 蔣 宛静 (国際学部 交換留学生)
- e. 「三次元蛍光スペクトル」..... 周 昀 (工学部 交換留学生)
- f. 「日本の通信制高校について」..... ラ ティ フェ (国際学部 交換留学生)
- g. 「夕顔の恋を通して見る平安時代における女性美に関する社会意識」
..... 高 暁慧 (国際学部 交換留学生)
- h. 「国民的アイドル：嵐」..... 陳 妍静 (国際学部 交換留学生)
- i. 「グローバルな日本の現代音楽」..... ソン・チュンマン (国際学部 交換留学生)
- j. 「現代の日本社会に生きている伝統：着物について」..... キム ヘソプ (国際学部 交換留学生)
- k. 「日本から学ぶ地震対策」..... ジョン・スジ (国際学部 交換留学生)
- l. 「お正月料理に見る日中の食文化の相違点」..... 王 夢琪 (国際学部 交換留学生)
- m. 「日本のアニメについて」..... ソク ジェソン (国際学部 交換留学生)
- n. 「日本の高齢化社会に関する一考察」..... 周 敏青 (国際学部 交換留学生)

③質疑応答

④総評：戚 傑 (「中級日本語短期留学プログラム」コーディネーター)



修了発表風景



修了発表風景



修了発表会場風景

(3) 中級日本語補習

中級日本語補習は、初級レベルを終了した学生を対象に、文法・対話・読解・作文の4つの基本的な技能が総合的に学べるように構成された日本語科目群で、中級レベルの日本語能力を養成することを目的としている。

本学で学ぶ留学生の数が年々増加しており、大学院生と学科・学部研究生は留学生のやく半分を占めている。大学院生と学科・学部研究生の中に、日本語授業の単位修得を目的としていないが、日本語を勉強したい学生も大勢いる。中級一般日本語は、宇都宮大学に在籍するこれらの大学院外国人留学生と学科・学部研究生(科目等履修生を除く)を対象に開講する無単位の日本語教育科目である。

平成 27 年度前期と後期に、「中級日本語補習：総合 A」、「中級日本語補習：聴解と会話 A」、「中級日本語補習：読解と作文 A」、「中級日本語補習：学術日本語 I」と「中級日本語補習：学術日本語 II」の 10 コマの授業が開講された。

(威 記)

(4) 学部 1 年生日本語補講

1) 概要

授 業 名	日本語特別演習
曜日・時間	水曜日・11-12
目 的	大学入学初期に必要な語彙力・漢字・発音の強化
受 講 学 生	4 名*
担 当	鎌 田 美千子

* 該当学生は、レベルチェックテストの結果をもとに決定。

2) 内容

講義を聞いてノートを取る上で基本となる語彙と漢字、また会話及び口頭発表の基本となる正しい発音を取り上げ、大学での勉学を進めていく上で必要な日本語能力の養成を図った。具体的には、次の通りである。

・ 同音異義語を含む文のディクテーション

- ・漢字の読み方と使い方の練習
- ・発音・イントネーションの練習

使用テキスト：

『完全マスター漢字日本語能力試験1級レベル』『完全マスター漢字日本語能力試験2級レベル』スリーエーネットワーク
 『大学生のための日本語—効果的学習のために』産能大学出版部
 『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク
 その他

(鎌田 記)

(5) 日本語以外の関連科目

前年同様、以上の日本語関連科目の他に留学生・国際交流センターの開講科目として、「日本語以外の関連科目」を下記のとおり開講した。

1) 開講科目

<前期>

- ①多言語コミュニケーション学 A (月 9-10 時限) 担当：吉田一彦
- ②日本語論述表現法 B (水 1-2 時限) 担当：吉田一彦
- ③ Linguistic Typology and Language Communication (火 3-4 時限) 担当：吉田一彦

<後期>

- ①多言語コミュニケーション学 B (月 9-10 時限) 担当：吉田一彦
- ②日本語論述表現法 A (水 3-4 時限) 担当：吉田一彦
- ③ Japanese Communication Arts (水 7-8 時限) 担当：戚傑

2) 授業の概要

- ①「多言語コミュニケーション学 A」「多言語コミュニケーション学 B」
日本語・英語とクラスメートの母語など使える言語をすべて使って、相互理解のためのコミュニケーションのための実習をする。
- ②「日本語論述表現法 B」「日本語論述表現法 A」
日本語で学術的なレポートや論文を作成するために必要な知識と表現技術を身につける。
- ③「Linguistic Typology and Language Communication」
言語学の方法や専門知識を活用して、日本語・英語を含む自然言語の特徴を明らかにする。タスクをクラスメートと協力をして行うことで、授業をとおした交流をする。
- ④「Japanese Communication Arts」
日本の社会システム、文化および歴史的背景を踏まえて日本語によるコミュニケーションの特質に関する理解を目的とする。

(吉田 記)

1.2 基盤教育および学部・大学院での授業

(1) 日本語科目

宇都宮大学では、留学生・国際交流センター以外にも複数の部局で日本語教育を実施している。留学生・国際交流センターでは、その中で基盤教育留学生日本語科目を担当し、学部留学生と特別聴講学生（交換留学生、日本語・日本文化研修留学生）を対象とした以下の科目を開講している。

<基盤教育>

①学部1年生を対象にした必修科目

・「アカデミック・ジャパニーズ」:

大学での勉学に必要な日本語能力を総合的に養う。

・「日本語アカデミック・リーディングⅠ」:

さまざまなテーマに関する論説文を取り上げ、日本語の読解力を養う。

・「日本語アカデミック・ライティング」:

学術的な文章の書き方と日本語表現を取り上げ、日本語の文章表現力を養う。

②選択科目

・「日本語アカデミック・リーディングⅡ」:

大学での専門分野の勉学に必要な高いレベルの読解力を養う。

・「日本語アカデミック・プレゼンテーション」:

ゼミや演習科目での発表全般（レジュメ、スライドを含む）に必要な日本語運用力を養う。

・「人文社会系のための専門日本語」（計画開講）:

学術的な言語運用場面（人文社会系）を想定し、専門教育に必要な日本語運用力を養う。

・「科学技術のための専門日本語」（計画開講）:

学術的な言語運用場面（理工系）を想定し、専門教育に必要な日本語運用力を養う。

・「日本事情」

日本の社会や文化、自然を概観するとともに、日本人のコミュニケーションやものの考え方への理解を図る。

基盤教育の日本語科目時間表

【前期】

	3-4時限	5-6時限	7-8時限	9-10時限
月		アカデミック・ジャパニーズ（鎌田）	科学技術のための専門日本語（谷）	
火	日本語アカデミック・リーディングⅠ（梅木）			
水			日本語アカデミック・リーディングⅠ（梅木）	アカデミック・ジャパニーズ（鎌田）
金		日本事情（モリソン）		

【後期】

	3-4時限	5-6時限	7-8時限	9-10時限
月		日本語アカデミック・ライティング（鎌田）	日本語アカデミック・ライティング（鎌田）	
水	日本語アカデミック・リーディングⅡ（梅木）			
木			日本語アカデミック・プレゼンテーション（鎌田）	

（鎌田 記）



(2) 日本語以外の授業科目

留学生・国際交流センターの教員は、(1)の日本語科目に加えて、基盤教育、国際学部、教育学部、国際学研究所および教育学研究科の授業科目のほかに、全学科目や栃木グローバル人材育成プログラム共通科目を担当している。平成27年度に留学生・国際交流センター教員が開講した授業科目は以下の通りである。

<基盤教育>

学期	科目名	担当教員	備考
前期	多言語コミュニケーション学A*	吉田	英・日2言語による授業
	ワークショップで学ぶ「変わりゆく現代社会の中の私たち」	湯本	アクティブ・ラーニング科目 同じ内容で2クラス開講
後期	多言語コミュニケーション学B*	吉田	英・日2言語による授業
	Japanese Communication Arts*	戚	英語で行う授業
	言語習得論	鎌田	
	ワークショップで学ぶ「ボランティアと市民活動」	湯本	アクティブ・ラーニング科目

* 全学科目 (Learning+1)

<国際学部>

学期	科目名	担当教員	備考
前期	日本語教育 I	梅木	日本語教育プログラム必修科目
	日本語教育 II 演習	吉田	
	日本語教育方法論演習	鎌田	
	日本語教育特別演習	鎌田 + 梅木 + 吉田	日本語教育プログラム必修科目
	移民と多文化教育	戚	
	移民と多文化教育演習	戚	
	グローバル教育論演習	湯本	
後期	日本語教育 II	吉田	日本語教育プログラム必修科目
	日本語教育方法論	鎌田	日本語教育プログラム必修科目
	Linguistic Typology and Language * Communication	吉田	英語で行う授業
	グローバル教育論	湯本	
	グローバル化と外国人児童生徒教育	戚 + 鎌田 + 5名	5名は国際学部・教育学部の教員
	卒業研究準備演習	吉田 戚 鎌田 湯本	
不定時	国際キャリア開発	湯本 + 2名	2名は国際学部の教員
	国際キャリア実習	湯本 + 2名	2名は国際学部の教員
通年	卒業研究	吉田 戚 鎌田	卒業論文指導

* 全学科目 (Learning+1)

<全学科目 / Learning+1 (グローバル人材育成プログラム履修科目) >

学期	科目名	担当教員	備考
不定時	国際インターンシップ	吉田 + 湯本 + 1名	1名は国際学部の教員
	グローバル化の進展と日本の展望	綿貫	日本語で行う集中講義
	International Political Economics	小林	英語で行う授業
	Global Sustainable Development Issues	綿貫	日本語と英語で行う集中講義
	Globalization and Society	湯本	英語で行う集中講義
	Risk Management	森口	英語で行う集中講義

<国際学研究科・博士前期課程>

学期	科目名	担当教員	備考
前期	国際交流と日本語教育	吉田	
	日本語論述表現法B	吉田	
	Academic Writing	戚	英語で行う授業
	Methodologies of English Dissertation Writing (Lecture)	戚	英語で行う授業
	言語教育論	鎌田	
後期	グローバル教育研究	湯本	
	日本語教育特論	梅木	
	日本語論述表現法A	吉田	
	多文化教育論	戚	
通年	国際学臨地研究	戚 吉田 鎌田	
	国際文化特別研究 / 国際交流特別研究 / 国際社会特別研究	吉田 戚 鎌田	修士論文指導

<国際学研究科・博士後期課程>

学期	科目名	担当教員	備考
前期	国際学基礎演習	吉田 戚 鎌田	
	国際学リサーチ演習	梅木 吉田 戚 鎌田	
後期	日本語教育学研究	梅木	
	現代日本語論	吉田	
	多文化教育研究	戚	
	言語教育研究	鎌田	
	特別研究Ⅰ	吉田 戚 鎌田	博士論文指導
通年	国際学臨地研究	梅木 吉田 戚 鎌田	
	特別研究Ⅱ	梅木* 吉田 戚 鎌田	博士論文指導
	特別研究Ⅲ	吉田 戚 鎌田	博士論文指導

*前期のみ

<教育学研究科・修士課程／専門職学位課程>

学期	科目名	担当教員	備考
前期	Academic Writing	戚	英語で行う授業
	Methodologies of English Dissertation Writing	戚	英語で行う授業

<とちぎグローバル人材育成プログラム共通科目>

学期	科目名	担当教員	備考
不定時	国際キャリア開発	湯本 + 2名	2名は国際学部の教員
	グローバル化の進展と日本の展望	綿貫	日本語で行う集中講義
	Global Sustainable Development Issues	綿貫	日本語と英語で行う集中講義
	Globalization and Society	湯本	英語で行う集中講義
	Risk Management	森口	英語で行う集中講義

(梅木 記)



1.3 留学生プログラム

(1) 日韓共同理工系学部留学生予備教育

今年度、本学への日韓共同理工系学部留学生の配置はなかった。4月21日に国立国際教育院（大韓民国・ソウル特別市）で開催された「韓日共同学部留学生事業説明会」において、本学に関する資料提供を行った。この説明会は、日韓共同理工系学部留学生の保護者を対象にしたものである。例年開催されている「日韓共同理工系留学生事業協議会」は、6月26日に筑波大学で行われた。

（鎌田 記）

(2) 日本語・日本文化研修留学生プログラム

留学生・国際交流センターでは旧称「留学生センター」として発足以来、文部科学省の国費留学生である「日本語・日本文化研修留学生」（略称「日研生」）を毎年受け入れている。日研生は10月に来日後、必修科目4科目および選択科目12科目を受講しながら日本語能力の向上と日本文化に関する専門知識の深化を図る。それと並行して研究テーマを決め、1年間にわたりそのテーマに関連する分野の教員の指導の下に研究を遂行、最後にその成果を発表し、研修論文としてまとめる。

1) 日本語・日本文化研修プログラムの授業科目：必修科目

	前期（平成26年度日研生対象）	後期（平成27年度日研生対象）
必修	「日本語・日本文化Ⅱ」（水曜日：10：30～12：00） 「日研生特別研究Ⅱ」（不定期）	「日本語・日本文化Ⅰ」（月曜日：12：50～14：20） 「日研生特別研究Ⅰ」（不定期）
選択	自分の研究テーマに関連する基盤教育・学部・留学生・国際交流センター科目の中から12科目選択（1年間で）	自分の研究テーマに関連する基盤教育・学部・留学生・国際交流センター科目の中から12科目選択（1年間で）

2) 平成26年度日本語・日本文化研修留学生

平成26年度の日研生は9名で、前年度の11名に次ぐ人数となった。地域も中国、タイ、チェコ、アメリカ、チリと多様であり、総じて日本語能力も高く、日本文化への関心の高い学生が揃った。研究テーマは以下の通りで、中には日本人もよく知らないような内容のものもあり、学生達の日本文化への関心が表面的なものではなく、本格的な日本研究に高められていることが窺えた。全員7月には研修論文発表会を行い、研修論文を書き上げた。研修論文は、平成27年12月に研修論文集として留学生・国際交流センターから発行した。

名前・国	研修テーマ	指導教員
VALEK JAKUB（チェコ）	日本の仏教における武神と武士の関係	高山 慶子（教育学部）
GIUSTO IRALIA（イタリア）	自然災害と美術	株田 昌彦（教育学部）
SHOMURA KELSEY MARI（アメリカ）	着物に与えられた日本人女性のジェンダーやアイデンティティ	モリソン・バーバラ（国際学部）
CHIRNOV IVAN（チェコ）	チェコと日本の交流史	渡邊 直樹（国際学部）
JAROLIM MARCEL（チェコ）	即身仏 一仏になろうとした人々	高山 慶子（教育学部）
馮 燕婷（中国）	在日外国人の子育てに関する研究 —「子育て」「家庭内で使用する言語」「受けさせたい教育」—	田巻 松雄（国際学部）
JOSEFINA BEATRIZ DEL CAMPO SALINAS（チリ）	ナショナル アイデンティティ —日本&チリ—	スエヨシ・アナ（国際学部）
PONGPATARAVIT PIYAPORN（タイ）	日タイ外来語の交流	佐々木 一隆（国際学部）
魯 燕青（中国）	中国白話小説が日本読本小説に与えた影響 —「白娘子永鎮雷峰塔」と「蛇性の姪」を例に一—	高山 道代・大橋 敦（いずれも国際学部）

○校外学習 (平成 26 年 - 27 年)



那須・黒羽 (11 月)



結城・益子 (2 月)



烏山 (5 月)



日光 (7 月)

○研修論文発表会 (平成 27 年 7 月)



3) 平成 27 年度日本語・日本文化研修留学生

平成 27 年度の日研生は以下の 7 名で、前半の研修終了時点 (2016 年 2 月) のテーマは以下の通りである。現在さらにテーマを絞り込みながら各自で研修を進めている。

名前・国	研修テーマ	指導教員
SCHIR MARTIN (スロバキア)	小説や漫画における漢字の当て字について	高山 道代 (国際学部)
GRANT DAVID (チェコ)	言霊、禪	中島 望 (教育学部)
DONKAEW KWANCHANOK (タイ)	外国人に教えたいきれいな表現	佐々木 一隆 (国際学部)
陳 婷 (中国)	21 世紀の日本女性の地位	モリソン・バーバラ (国際学部)
KOONARA HESHANI DARSHIKA (スリランカ)	日本のゴミの分別について	高橋 若菜 (国際学部)
DUARTE BARBOSA E SILVA THIAGO FERNANDO (ブラジル)	JICA のブラジルでの日本語教育	吉田 一彦 (留学生・国際交流センター)
GOLJA ANA GRUSA (スロヴェニア)	自衛隊について	清水 奈名子 (国際学部)

(梅木 記)



1.4 英語関連科目

国際交流が盛んになるに連れ、宇都宮大学から海外へ派遣される日本人学生、中でも大学院生の数が年々増加している。平成9年度から平成25年度まで、約350名の日本人学生が海外に派遣された。このような実績からもわかるように、本学での教育・研究の国際化が他校に引けを取ることなく確実に進行しているところである。このような流れをさらに推し進めていくことを目的に、留学生・国際交流センターでは、留学生や海外を目指す日本人学生の多様なニーズにこたえるべく、英語教育と英語による留学生指導を強化するように努めてきた。その一環として、留学を希望している日本人学生や国際会議での研究発表・外国との学術交流を希望する大学院生を対象に、英語コミュニケーション能力の向上に照準を合わせたカリキュラムの開発が、留学生センターで進められた。その結果、平成14年度に、コアカリキュラムの改訂に合わせて、英語による論文作成方法に関する授業科目を留学生センターの開講科目として開講されることになり、今日に至っている。平成27年度は、前年度に引き続き以下に示す英語関連科目を開講した。その概要を以下に報告する。

(1) 科目名等

	講義・授業名	前期 / 後期	種別・対象学年・対象学生	単位数	担当教員
1	Japanese Communication Arts	後期	共通教育 1-4年次 日本人学生・留学生	2	戚 傑
2	Methodologies of English Dissertation Writing	前期	教育研究科・国際学研究科・留学生 センター／大学院生・研究生・全学 の日本人学生・留学生	2	戚 傑

(2) 各科目の概要

1) 「Japanese Communication Arts」

本科目は、留学生センターの開講科目として、平成15年度後期から、全学の日本人学生および留学生向けに開講してきた。当初、留学生センターの開講科目は単位認定されなかったが、単位認定をして欲しいという学生からの強い希望を受け、平成16年度に共通教育の複合系の授業科目として、学部学生1～4年次の2単位選択科目となり、今日に至っている。本科目は、日本の社会システム、文化および歴史的背景を踏まえて日本語によるコミュニケーションの特質に関する理解を目的とする。なお、本科目は、英語により行なわれる。講義の内容等は以下の通りである。

・ Course Description :

In this course, we will explore various aspects of Japanese Communication Arts. This course will introduce different communication styles, which are crucial for successfully functioning in Japanese society. Japanese has a set of discourse styles, or registers that can seem complex to newcomers. We will look at the styles of speech used in personal versus public situations, by men and by women, by old people and young people, in a way that will help clarify the differences and offer you a window into Japanese culture. In addition to presenting the different styles, the class will help you situate them in terms of Japanese history, society, culture and education. The ultimate goal of this course is to help students enter the Japanese way of thinking through the Japanese language and through a deep knowledge of Japanese culture and society.

・ Weekly Schedule

Week 1 : Course introduction : what does “communication arts” mean?

Week 2 : The Japanese style of introducing oneself : underestimating oneself.

Week 3 : The differences between casual and formal speech in Japanese.

Week 4 : Honorific language and humble language.

- Week 5 : Modesty : the Japanese way of responding to compliments.
- Week 6 : *Inside and outside* : words that shape personal relationships.
- Week 7 : *Tatema* and *honne* : the gap between words and real intentions.
- Week 8 : Generation differences in speech.
- Week 9 : Gender differences in speech.
- Week 10 : Japanese pop songs : exemplifying gender differences in the family and society.
- Week 11 : The typical Japanese way of apologizing : no reason given.
- Week 12 : Vague expressions : saying “No!” without using the word “No!”
- Week 13 : Popular words : representing current social issues.
- Week 14 : Humor and wit : popular TV presenters’ communication styles.
- Week 15 : Student presentations : towards a better understanding of Japanese communication styles.

2) 「Methodologies of English Dissertation Writing (Lecture)」

本科目は、国際会議での研究発表や外国との学術交流の機会が多い大学院生を多く有する工学部からの強い要望を受けて平成 14 年度 10 月から留学生センターの開講科目として提供してきたものである。学生から好評され、また単位認定をして欲しいという学生からの強い希望を受け、平成 16 年度からは教育学研究科から、前期 2 単位と後期 2 単位での科目として単位認定されることになった。本講義は全学の日本人学生、外国人大学院生・研究生を対象者とし、英語による学位論文や長い研究報告等を作成・発表する際必要となる基本事項の習得を目的とする。

・授業内容 / Course Description

本授業では、論文作成の準備、研究の遂行、書き上げおよび代表的な学位論文の構成について講義する。英語による学位論文や長い研究報告等を作成・発表する際必要となる基本事項が習得出来るように計画されている。

This course is designed to provide an introduction to methodologies of writing dissertations or other large academic projects in English. Lectures will be arranged topically, with a view to familiarizing students with the most representative styles of writing and publishing in English. The purpose of this course is also to help students get to know the styles used for presenting research results in English.

・到達目標 / Course Objectives

i. 学術的目標 / Academic Support

- ・学位論文等の構成、作成にあたっての注意事項等を理解する。

To become familiar with styles of writing dissertations or other academic projects in English.

- ・英語で研究成果を口頭発表するテクニックを学ぶ。

To better understand styles of presenting research results in English.

ii. 技術的目標 / Technical Support

- ・論文作成にあたっての目標管理技術を習得する。

To help students set steps and goals for writing dissertations.

- ・論文作成に際して時間とストレスを自己管理できるようにする。

To help students manage time and stress.



• 授業の計画／ Weekly Schedule

- 第1週 Communication : organizing the committee
- 第2週 Laying the groundwork for the dissertation or thesis
- 第3週 Finding a research problem
- 第4週 Topic and passion
- 第5週 Writing a successful proposal
- 第6週 Defending the proposal
- 第7週 Theory-the research wheel
- 第8週 Literature review
- 第9週 Research methodologies I : quantitative perspective
- 第10週 Research methodologies II : qualitative perspective
- 第11週 Research methodologies III : some other methods
- 第12週 Mastering the academic style I : APA style
- 第13週 Mastering the academic style II : MLA style
- 第14週 Common ethical concerns
- 第15週 Student presentation : show time

(感 記)

2 相談体制・生活支援

2.1 基本的認識

下記の〔事前の対策〕と〔様々な制約の中での適切・迅速な対応〕については、毎号同じ文章を掲載している。これは、留学生・国際交流センターが実施する「相談・指導」の根本に関わるからである。

〔事前の対策〕

留学生の置かれている立場は不安定なものである。一見何の問題もなく、元気で楽しく過ごしているようにみえる留学生でも、日本という「異国=外国」での生活は母国同様であるはずがなく、常にストレスと隣り合わせの毎日なのである。留学生と接する教員・職員はこのことを基本的認識として心にとどめ、日頃から彼らの行動や表情に注意を払う必要があるだろう。そして何らかの変化が見えたとき、留学生に歩み寄り、その変化に危険な要素が含まれていないかどうかを確認することが常に求められているのである。つまり、すでに起こってしまった問題にどのように対処するかということ以前に、問題を起こさないための事前の解決がきわめて重要な任務となるのである。

〔様々な制約の中での適切・迅速な対応〕

しかしながら、全ての留学生にまんべんなく接することは不可能といわざるをえない。そこから何らかの問題が生ずることは避けられない事実でもある。実際のところ、大学が提供している生活環境、就学環境は残念ながら必ずしも適正なものとはいえない。それが原因となり留学生の心理が揺らぎ、留学生の生活に重大な影響を与えることもありうるのである。留学生を取り巻く環境を改善するには多額の資金が必要となり、大学全体として取り組む姿勢が十分整っていない現実には遺憾といわざるをえないが、そうした状況であっても、留学生と接する教員・職員は、むしろその中でより良い相談体制、より良い生活支援はどうあるべきかを考えると同時に、さまざまな制約下の現状でも実践できるものを実践していくという姿勢が必要なのである。特に深刻な問題を抱える留学生に対しては、解決に向けて適切に対応し、迅速に行動することが求められている。

2.2 相談体制

留学生・国際交流センター専任教員5名のうち1名が生活・就学相談の担当者である。しかし、担当教員だけでなく、他の教員も日本語教育や国際交流推進を主な業務とすると同時に、必要に応じてその都度、留学生からの生活・就学相談に乗っている。授業中、または授業の前後に何気なく交わす会話も重要である。「相談」と改まってかまえるのではなく、留学生が言葉で表すことができないでいる、その時々々の心理状態を自然な対応で探ることが出来るからである。それにより、深刻な事態になる以前に留学生の気がかり、不安、現実的な問題を取り除く役割を果たしている。

5名の教員各自がオフィスアワーを設け、出来る限り留学生の相談に乗れる体制も取っている。留学生は、このオフィスアワーに、授業等で接する機会の多い教員の所へ相談に行く傾向がある。その際、留学生によっては長い滞在中、精神的に不安定な状態に陥る者もある。これはかなり深刻なケースであり、そのような場合、彼らは相談相手として先ず自分が最も信頼でき、しかも母国語でコミュニケーション出来る人を求める。当センターには、英語、中国語、フランス語、タイ語、韓国語のできる教員がおり、実際に、深刻な問題を抱えて担当教員を訪れた留学生もいる。言語に関しては完璧とまでは行かないまでも、ある程度整った環境であると判断される。

留学生・国際交流課の職員も、留学生の相談に大きな役割を果たしている。彼らが諸手続等を行うために留学生・国際交流課の窓口に来た際、積極的に留学生に話しかけ、心配事、相談したいことがないかどうか、常に配慮している。特に、交通事故、病気などの連絡が入った場合、休日を問わず、留学生をサポート出来



る体制となっている。また、英語及び中国語に堪能な職員が数名おり、留学生のサポート体制を強化している。

留学生会館に居住する留学生に対しては、留学生会館主事が相談担当者となっている。週に2日、夕方から数時間、主事が会館に出向いて留学生の相談に当たっている。

この様に、相談体制については、相談・指導担当の教員だけでなく、センターの教員・職員が総動員で当たっている現状である。

【平成 27 年度留学生センター教員のオフィスアワー】

曜日 教員名	月 MON	火 TUE	水 WED	木 THU	金 FRI	その他 (E-mail)
梅木		12:10~13:10				umeki@
吉田	16:10~17:40					ysd@
戚		12:00~13:00				jqi@
鎌田				11:30~12:30		kamada@
湯本		12:00~13:00				yumoto@

* @ 以下は、cc.utsunomiya-u.ac.jp

2.3 相談実績

留学生・国際交流センターでは、留学生の様々な生活上の問題について相談を受けるのは当然のことながら、それに加えて日本人学生の留学関連の相談や、留学生と日本人学生の交友・交流に関するアイデア、企画に関する相談等も行っている。以前は、個々の相談に関する情報（日時、内容、留学生・日本人学生等の種別）を表で示していたが、実際に行った相談を全て記録することが実質的に不可能なので、2011 年号以降、表による実績表示を止めている。相談・指導と言っても、教員は授業等の大学における通常の主要業務にも携わっており、主に時間的理由により後回しとなり、重要であるなしに関わらず、また、手抜きということではなく、記録漏れとなってしまう。また、近年ではメールや電話による連絡、問い合わせ、または相談が増加しており、これらを全て完璧に記録できる状況ではない。この様な場合における対応の仕方は、大学全体として考えていく必要がある。

以下、相談内容の概要を記述する。

〔留学生〕

修学・学習／進学（大学院受験等）／アルバイト／奨学金／各種保証人／ビザ取得

〔日本人学生〕

留学相談（留学先の情報、留学前の学習、各種書類作成）／チューター関連／留学生との交流

上記以外に、個々の教員が個別に相談・指導に当たっていることは既に記述した通りである。例えば、レポートや論文の書き方指導・添削、授業関連の相談等は個々の教員が行っている場合が多く、その方がより効率的である。

留学生の相談で深刻なものは、やはり経済的な問題である。特に、奨学金や入寮に関するものが重要なものである。例えば、本国からの仕送りも十分ではなく、奨学金も受給できず、授業料免除も受けられず、学生寮（国際交流会館）にも入れず、また、条件の良いアルバイトが見つげにくい、または病気・事故で身体を壊してしまい、アルバイトが出来ないという場合である。この様な場合が、考えられる最悪のものである。実際、この様な状況に置かれる留学生が毎年少なくとも1～2名おり、相談に当たることになる。その場合、個人的には

ただ話を聞くのみで、根本的な解決に結びつくようなことは何も出来ないのが実情である。しかし、学生寮については、陽東寮、第1寮及び第2寮において各4室ずつ、留学生が入寮できる体制になっている。所謂、学生寮の「混住化」である。1年以上の長期間滞在する留学生の場合、国際交流会館には1年間しか居住できず、それ以後は高額な民間のアパート等に引っ越ししかなかったが、「混住化」により比較的安価な学生寮に住むことが可能になった。しかし、第1寮及び第2寮の4室とも満室の状態であり、さらに混住用の部屋を増やす必要がある。また、大学近辺の比較的安価なアパートをまとめて大学として契約し、これを留学生用の住居に充てることも検討する必要がある。いずれにしても、大学が、留学生の経済面を考慮した支援体制をより一層充実させて行くよう、センターとして積極的に働きかけて行きたい。

(横田 記)

2.4 支援活動

(1) 留学生アドバイザー

本学の在學生で、日本人学生と外国人留学生間の交流促進のため、各種イベントを企画・実施している。留学生アドバイザーには、海外留学経験者や海外留学予定者の他、外国人留学生も含まれている。留学生・国際交流センター等が実施する留学生関連の交流会や、留学生の生活上のサポート等にも協力するなど、幅広く活動している。

(2) チューター

外国人留学生に対し、各留学生の学習・研究指導(予習・復習の手伝い)を中心に、日本語指導、日常の世話(学内外の案内、諸手続き、買い物、宿舎探しの補助等)を行う。チューターの支援を必要とする留学生ごとに、留学生の専門や出身国及び語学力等を勘案し、チューター1名を割り当てている。チューターは、留学生が大学院生・研究生の場合は入学後最初の1年以内、学部生の場合には最初の2年以内で、指導教員の判断により必要と認める期間配置されている。

(留学生・国際交流課)

2.5 各種オリエンテーション

外国人留学生に対しては、交換留学生や学部新入学生を対象に、宇都宮大学において勉学する際に必要な日本語科目、基盤教育関係科目、日本での生活をする上での諸注意等に関するオリエンテーション及び説明会等を実施した。

(1) 国際交流会館入居オリエンテーション／防犯・安全指導

日 時：平成27年4月7日(火) 16:00～17:30

場 所：国際交流会館集会室

内 容：1) 宇都宮東警察署による防犯・安全指導
2) 国際交流会館における生活上の留意事項



(2) 4月来日留学生（学部留学生を除く）オリエンテーション

日 時：平成 27 年 4 月 8 日（水） 13：30～16：30

場 所：峰キャンパス 4B43 教室

- 内 容：1) 留学生・国際交流センター長の挨拶
 2) 教員の紹介
 3) 職員の紹介
 4) 日本で生活する際に注意すべき大事なこと
 5) 授業登録及び授業スケジュール等
 6) 日本語の授業について
 7) 中級日本語短期留学プログラム説明会

(3) 4月来日留学生生活上の留意事項説明会及び留学生歓迎会

日 時：平成 27 年 4 月 14 日（火） 15：30～

場 所：峰キャンパス 4B31 教室

- 内 容：1) 留学生・国際交流センター長挨拶
 2) 日本で生活する際に注意すべき大事なこと
 3) 留学生歓迎会（17：10～ 大学会館）



留学生歓迎会の様子（4月14日）

(4) 学部新入学生オリエンテーション

日 時：平成 27 年 4 月 15 日（水） 17：45～18：20

場 所：峰キャンパス 4B43 教室

- 内 容：1) 留学生・国際交流センター長挨拶
 2) 留学生日本語科目について
 3) 大学生活について

(5) 平成 27 年度交換留学生のための大学院進学説明会

日 時：平成 27 年 7 月 28 日（火） 13：30～14：00

場 所：留学生センター 4 階 国際交流学習室

- 内 容：1) 留学生・国際交流センター長挨拶

- 2) 各研究科の紹介
- 3) 各研究科の入試日程等

(6) 10 月来日留学生オリエンテーション

日 時：平成 27 年 10 月 1 日（水） 16：10～：18:00

場 所：峰キャンパス 4A35 教室

- 内 容：1) 横田センター長の挨拶
- 2) 教員の紹介
 - 3) 職員の紹介
 - 4) 日本で生活する際に注意すべき大事なこと
 - 5) 授業登録及び授業スケジュール等
 - 6) 日本語の授業について
 - 7) 中級日本語短期留学プログラム説明会

(7) 日本語・日本文化研修留学生オリエンテーション

日 時：平成 27 年 10 月 5 日（月） 13：00～

場 所：峰キャンパス 5号館 C 棟 4 階 ゼミ室 4

- 内 容：1) 日本語・日本文化研修について

(8) 国際交流会館入居説明会

日 時：平成 27 年 10 月 5 日（月） 16：00～17：00

場 所：国際交流会館集会室

- 内 容：1) 国際交流会館における生活上の留意事項

(9) 10 月来日留学生生活上の注意事項説明会及び留学生歓迎会

日 時：平成 27 年 10 月 13 日（火） 15：00～16：30

場 所：峰キャンパス 4B33 教室

- 内 容：1) 留学生・国際交流センター長挨拶
- 2) 交通のきまり、防犯について（宇都宮東警察署から）
 - 3) 日本で生活する際に注意すべき大事なこと
 - 4) 留学生歓迎会（17：45～ 大学会館）

(10) 国際交流会館退去説明会

日 時：平成 28 年 1 月 26 日（火） 15：00～16：00

場 所：国際交流会館集会室

- 内 容：1) 航空券の手配
- 2) 国際交流会館での退去各種手続き
 - 3) 国際交流会館以外での各種手続き

（留学生・国際交流課）



2. 6 外国人留学生見学旅行

(1) 実施概要

9月3日（木）より1泊2日の日程で、鎌倉および富士山周辺への見学旅行を実施した。本年度は29名の留学生が参加した。主な実施概要と旅程は、以下の通り。

日 程：平成27年9月3日（木）～27日（金） 1泊2日

行き先：鎌倉市内および富士五湖周辺・富士山五合目

宿泊先：石和温泉（「ホテル甲斐路」）

参加者：留学生29名 留学生アドバイザー3名 計32名

引率者：教員 湯本 浩之 職員 飯島 賢道 計2名（合計：34名）

旅 程：

< 3日（木） >

06：45 宇都宮大学正門前集合

07：00 宇都宮大学出発（経由：北関東道→東北道→首都高速→横浜横須賀道）

11：00 鎌倉・鶴岡八幡宮前到着。昼食・自由散策。

15：00 高德院（鎌倉・長谷）集合

15：30 高德院出発（経由：新湘南バイパス→圏央道→中央道）

18：30 石和温泉到着

19：30 夕食

22：00 就寝

< 4日（金） >

07：00 起床・朝食

08：00 石和温泉出発

09：00 「西湖いやしの里・根場」到着。自由見学。

10：10 青木ヶ原樹海「鳴沢氷穴」到着。ガイドツアー。

11：10 「鳴沢氷穴」出発

12：10 富士山五合目到着。昼食・自由散策。

14：00 同出発（経由：中央道→首都高速→東北道→北関東道）

18：30 宇都宮大学到着・解散。

(2) 主な見学先と参加者の行動

1) 第1日目：鎌倉周辺

初日は、午前7時に本学を出発し、11時に鎌倉の鶴岡八幡宮前に到着。同八幡宮を参拝後、留学生は鎌倉市内を自由散策し、午後3時に「鎌倉大仏」で知られる高德院（鎌倉・長谷）に現地集合。境内を見学後に宿泊先の山梨の石和（いさわ）温泉へと向かった。宿泊先の旅館には午後6時半頃に到着。

2) 第2日目：富士山および富士五湖周辺

翌朝8時に旅館を出発し、最初に「西湖いやしの里・根場（ねんば）」を見学した。この施設は昭和41年に台風による土石流によって壊滅的な被害を受けた茅葺集落を再現した野外博物館である。敷地内には、約20棟の茅葺民家が復元されており、それぞれが資料館や体験工房などの生涯学習施設のほか、食事処や土産物店などの観光施設となっている。その後、青木ヶ原の樹海内のある「鳴沢氷穴（Ice Cave）」を見学。ここは国の天然記念物に指定された溶岩洞窟で洞窟内の平均気温は摂氏3℃と低く、夏でも氷で覆われている。留学生達は、巨大な氷柱に歓声をあげながら、腰をかがめて洞窟内を30分ほどかけて一周していた。

また、洞窟を出てからは樹海内を 30 分ほど散策。世界文化遺産となった富士山の噴火の歴史をはじめ、樹海や溶岩洞窟について説明をネイチャーガイドの方から受ける機会を持った。11 時過ぎには氷穴を出発。富士スバルラインを登って富士山五合目に到着。レストハウス内での昼食後は五合目周辺での自由行動とし、午後 2 時に五合目を出発。全員無事に本学に到着し解散した。

(湯本 記)



鶴岡八幡宮の前で



高德院（鎌倉大仏）の前で



宿泊先での夕食の様子



3 留学生交流支援

3.1 栃木県地域留学生交流推進協議会

本協議会は、栃木県における留学生等の円滑な受入の促進と交流活動の推進を図り、地域住民の国際理解に寄与するために設立されたもので、県内の高等教育機関、国の機関、地方公共団体、経済団体及び国際交流団体等で構成されている。本学が事務局となっており、本年度は7月に総会、3月に運営委員会を開催した。

(1) 栃木県地域留学生交流推進協議会総会

開催日時：平成27年7月15日（水）15：30～

- 議 題：1) 平成26年度栃木県地域留学生交流推進協議会実施事業について
2) 平成26年度本推進協議会実施事業経費決算について
3) 平成27年度本推進協議会実施事業計画（案）について
4) 平成27年度本推進協議会実施事業経費予算（案）について
5) 平成27年度本推進協議会感謝状贈呈候補者（案）について
6) その他

- 報告事項：1) 平成26年度県内各種団体等による主な外国人留学生交流・支援事業について
2) 本推進協議会事業会計に係る平成26・27年度監査員について
3) その他

(2) 栃木県地域留学生交流推進協議会運営委員会

当運営委員会は、栃木県地域留学生交流推進協議会規約（以下「協議会規約」という。）第8条第2項の規程に基づき設置され、協議会規約第3条に規定する協議事項について、具体的な実施方策を協議している。

開催日時：平成28年3月17日（木）15：30～

- 議 題：1) 平成27年度本推進協議会実施事業について
2) 平成27年度本推進協議会実施事業経費決算について
3) 平成28年度本推進協議会実施事業計画（案）について
4) 平成28年度本推進協議会実施事業経費予算（案）について
5) 平成28年度本推進協議会感謝状贈呈候補者について
6) その他

- 報告事項：1) 平成27年度県内各種団体等による主な外国人留学生交流・支援事業について
2) 本推進協議会事業経費に係る平成28・29年度監査員について
3) グローバル企業人材確保支援事業「栃木国際化推進プラン2016～2020」について
4) その他

(3) 留学生指導教員及び事務担当者研修会

当研修会は、栃木県内の大学、短期大学、高等専門学校において、留学生に対する教育、指導・相談を担当する教職員が一同に会し、留学生の受入れ・派遣における教職員相互の協力のあり方等について討議することにより、今後の留学生指導・支援の充実に資することを目的として、推進協議会が開催するものである。本年度は、以下のとおり研修会を実施した。

開催日時：平成28年3月17日（木）13：00～14：45

- 報告事項：1) グローバル企業人材確保支援事業について

- 2) 「栃木国際化推進プラン 2016~2020」について
 - 3) とちぎグローバル人材育成プログラムの周知について
- 情報交換：1) 日本の交通ルールの指導について
- 2) 留学生住居の確保について
 - 3) その他情報交換

(留学生・国際交流課)

3.2 交流支援事業

(1) 平成 27 年度新規留学生のためのガイダンス及び懇親ティーパーティー

開催日時：平成 27 年 5 月 30 日（土）13：30～16：30

実施内容：地域留学生交流推進協議会及び公益財団法人栃木県国際交流協会共催による平成 27 年度新規留学生のためのガイダンス及び懇親ティーパーティーを開催し、留学生及び関係者約 80 名が参加した。



懇親ティーパーティー

(2) 平成 27 年度留学生との交流会

開催日時：平成 27 年 7 月 15 日（木）17：10～18：40

実施内容：宇都宮大学内において地域留学生交流推進協議会主催による交流会を開催し、県内高等教育機関に在籍する留学生約 50 名、栃木県地域留学生交流推進協議会構成員及び宇都宮大学教職員等計約 80 名が参加した。



留学生との交流会

(3) 県内留学生ホームステイ・プログラム

日本の家庭での日常生活を体験することを通して留学生と県民の交流を図り、相互理解を促進することを目的に、栃木県地域留学生交流推進協議会と協議会の構成員である（公財）栃木県国際交流協会との共催で、県内大学等に在学する留学生を対象としたホームステイ・プログラムを毎年実施している。

本年度は、栃木県内のホストファミリーの協力を得て 1 泊 2 日の日程で実施し、留学生は日本家庭の生活を体験した。

開催日時：平成 28 年 2 月 20 日（土）～2 月 21 日（日）

場 所：県内各地のホストファミリー宅

参加者数：留学生 12 名、ホストファミリー 12 家庭



(4) 外国人留学生と地域交流団体等との交流会

国際理解、異文化交流の推進に寄与するため、留学生への日本文化の紹介・体験、地域交流団体の方々と
の異文化交流等を毎年行っている。本年度は、インドネシア、エジプト、コスタリカなど6カ国からの留学生、
近隣自治会、国際交流団体の関係者及び教職員等多くの参加を得て実施した。

開催日時：平成28年3月8日（月）12：30～18：30

場 所：大学会館（多目的ホール・和室・トークルーム・生協ホール）

参加者数：約120名

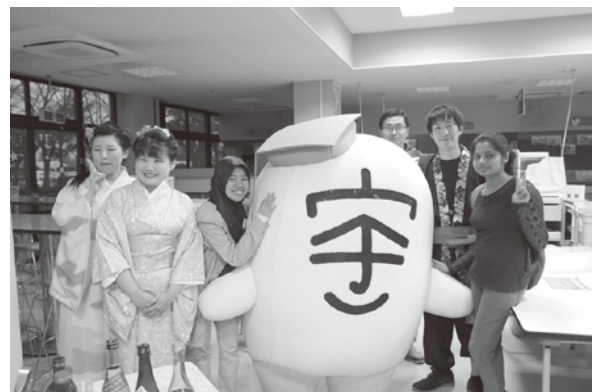
プログラム：

12：30～15：00 日本文化体験（和服の着付け・茶道・華道・折り紙）

15：00～16：50 日本の伝統的芸能鑑賞（日本舞踊・箏曲・琉球太鼓）

17：00～18：30 国際交流パーティー

（留学生・国際交流課）



地域交流団体との交流会

3.3 小・中・高等学校での国際交流

栃木県内の小・中・高校からの要請により、本学の留学生を各学校の授業にゲストとして派遣し、交流や
対話の場を提供している。留学生と児童・生徒が直接触れ合う国際交流を通じて、留学生にとっても日本の
児童・生徒にとっても、異文化理解や異文化コミュニケーションを図る上での貴重な機会となっているとの
評価が各学校から寄せられている。交流内容は様々であるが、予め派遣する留学生の国籍を伝えておくことで、
児童・生徒にその国について予習させることができ、交流時には予習した知識から留学生に多くの質問が活

発に寄せられる。留学生にとっても母国の良さを改めて感じる良い機会となっている。交流当日のみならず、その後も電子メール等で連絡を取り合い、長期的な交流ができていく学校もある。

<交流実績>

- 1) 宇都宮大学教育学部附属中学校
日 程：平成 27 年 5 月 20 日（火）
派遣人数：留学生 8 名
交流内容：日本語でパネルディスカッション
- 2) 栃木県立宇都宮南高等学校
日 程：平成 27 年 10 月 17 日（土）
派遣人数：タイ人留学生 3 名
交流内容：日本語でタイ料理の紹介・調理
- 3) 栃木県立栃木高等学校
日 程：平成 27 年 12 月 8 日（土）
派遣人数：留学生 6 名
交流内容：英語で科学技術に関するプレゼンテーション披露
- 4) 栃木県立栃木翔南高等学校
日 程：平成 27 年 12 月 15 日（火）
派遣人数：留学生 5 名
交流内容：日本語で自国についてのプレゼンテーション披露
- 5) 栃木県立宇都宮高等学校
日 程：平成 28 年 3 月 14 日（火）
派遣人数：留学生 7 名
交流内容：日本語で自国についてのプレゼンテーション披露

(留学生・国際交流課)



宇都宮高校での国際交流



4 留学生の獲得施策

4.1 日本留学フェア

独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)は、毎年世界各国で日本留学フェアを開催している。本学は、台湾、ベトナム及びタイの3ヵ国5都市で開催された留学フェアに参加した。各会場には専任の通訳が配置され、各学部・研究科の内容、日本の気候や住環境等について丁寧な説明を行った。

(1) 台湾

台湾では、高雄と台北で開催された留学フェアに参加した。台北においては、一時帰国中の本学留学生や交換留学として留学中の本学学生及び台湾在住の本学卒業生ら多くの関係者がブースを手伝いに訪れ、学生目線による本学のPRに協力してくれた。

1) 高雄

日 時：平成27年7月18日(土) 11:00～17:00

場 所：時代会館

参加機関：124機関(大学等61ブース、専門学校等60ブース、企業3ブース)

来場者数：1,407名(本学ブース：17名)

担 当 者：松金 公正(国際学部教授)

阿部 好子(留学生・国際交流課長)

黒澤 衣受美(留学生・国際交流課)

2) 台北

日 時：平成27年7月19日(日) 10:00～17:00

場 所：台北世界貿易中心

参加機関：141機関(大学等76ブース、専門学校等61ブース、企業5ブース)

来場者数：3,175名(本学ブース：42名)

担 当 者：松金 公正(国際学部教授)

阿部 好子(留学生・国際交流課長)

(留学生・国際交流課)



日本留学フェア(台湾・高雄)



日本留学フェア(台湾・台北)

(2) ベトナム

1) ハノイ

日 時：平成 27 年 10 月 31 日（土）9：30～16：00

場 所：メリアハノイホテル

参加機関：97 機関（大学等 77 ブース、専門学校等 20 ブース）

来場者数：1,405 名（本学ブース：両会場合わせて 60 名）

担 当 者：横田 信三（留学生・国際交流センター長）

吉田 一彦（留学生・国際交流センター教授）

大森 宣暁（工学研究科教授）

安森 亮雄（工学研究科准教授）



日本留学フェア（ハノイ）

2) ホーチミン

日 時：平成 27 年 11 月 1 日（日）9：30～16：00

場 所：ホテルエクアトリアル

参加機関：91 機関（大学等 71 ブース、専門学校等 20 ブース）

来場者数：1,433 名

担 当 者：横田 信三（留学生・国際交流センター長）

吉田 一彦（留学生・国際交流センター教授）

大森 宣暁（工学研究科教授）

安森 亮雄（工学研究科准教授）



日本留学フェア（ホーチミン）

＜報告＞ベトナム留学フェア

平成 27 年 10 月 31 日（土）にハノイ市で、11 月 1 日（日）にホーチミン市で開催され、横田信三留学生・国際交流センター長、同センター吉田一彦（筆者）、新設される地域デザイン科学部の教授スタッフとして次年度より留学生を受け入れる可能性のある工学研究科大森宣暁教員および安森亮雄教員の合計 4 名が参加した。

ハノイでは 1405 人、ホーチミンで 1433 人の入場者があり、2つの会場とも 100 名程度に本学の資料を配布した。これは前年とほぼ同数であったが、ハノイでもホーチミンでも本学ブースに立ち寄り学習・研究内容に関して相談していった人が 40 名ほどと昨年度を上回り、当地で日本留学への関心が高まっただけ日本で専門知識を得たり研究をしたりということが意識の中でより具体化してきているということが感じられた。

新学部に関する英語資料をこのフェア参加に合わせて用意することができず、本学の新たな教育との取り組みを、日本留学を考えるベトナムの人々に効果的に伝えられたとは言い難いけれども、留学生を多く受け入れている理系の教授スタッフが参加したことでニーズにより接近した助言をすることができたことは成果と言える。

今年度は同窓生の都合がつかず、本学に関するベトナム人の視点からの情報提供は昨年度ほどできなかった。しかし、これまでに同窓生の集まりやブース業務への協力という点で何も試みられなかったホーチミン在住の同窓生から事後に協力の申し出があったりもした。今後も同窓生との協力関係を緊密に維持することの重要性をあらためて感じた。

（吉田 記）

(2) タイ

1) バンコク

日 時：平成 27 年 12 月 13 日（日）9：30～17：00

場 所：Bangkok Convention Centre at Central World

参加機関：67 機関（大学等 52 ブース、専門学校等 15 ブース）

来場者数：1,961 名（本学ブース：18 名）

担 当 者：横田 信三（留学生・国際交流センター長）

阿部 好子（留学生・国際交流課長）

森川 由美子（修学支援課）



日本留学フェア（バンコク）

4.2 外国人学生への進学説明会

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）は、「外国人学生のための進学説明会」を東京及び大阪で年に1回ずつ主催している。この説明会は、日本の日本語教育機関等に在籍し、大学等への進学を目指している外国人留学生を主な対象として、進学希望にあった大学等を選択できるよう、全国から大学等が参加して、入試情報をはじめ、教育・研究上の特色等に関する最新の確かな情報の提供を行うものである。

留学生・国際交流センターでは、この説明会を外国人留学生獲得のための重要施策のひとつと位置づけ、毎年教職員を派遣している。

(1) 外国人学生のための進学説明会（東京会場）

1) 実施概要

日 時：平成 27 年 7 月 12 日（日）10：00～16：00

場 所：サンシャインシティ文化会館展示ホール D

参加機関：184 機関（大学・短期大学 153 校、専門学校 29 校、関係機関 2 機関）

来場者数：2,844 名（参考：H26 年度 2,536 名）

2) 本学ブース

担 当 者：湯本 浩之（留学生・国際交流センター准教授）

阿部 好子（留学生・国際交流課長）

勝瀬 京（入試課入学試験第二係長）

来訪者数：73 名

- 主な相談内容：①経済学、経営学に関する学部の有無
②母国に帰って日本語教師になる方法
③日本留学試験の成績や合格ライン
④各学部・研究科の入試内容

3) 特記事項

本年度は、経済学関係や日本語教師になるための質問が多かった。

（留学生・国際交流課）



外国人学生のための進学説明会（東京会場）



(2) 外国人学生のための進学説明会（大阪会場）

1) 実施概要

日 時：平成 27 年 7 月 18 日（土） 10：00～16：00

場 所：梅田スカイビルアウラホール及びステラホール

参加機関：116 機関（大学・短期大学 116 校、専門学校 18 校、関係機関 2 期間）

来場者数：1,322 名（参考：H26 年度 1,313 名）

2) 本学ブース

担 当 者：戚 傑（留学生・国際交流センター准教授）

飯島 賢道（留学生・国際交流課課長補佐）

来訪者数：20 名 + 1 機関

掲 示 物：本学の校旗 1 枚、本学ののぼり 3 枚、本学のポスター

主な相談内容：①経済学、経営学に関する学部の有無

②日本留学試験の成績や合格ライン

③入試科目と英語、TOEFL の扱い方

④大学院の受験方法

⑤研究生志願手続き

⑥授業料、授業料免除、奨学金、アルバイト等生活全般

3) 特記事項

①台風の影響により公共交通機関がほぼ麻痺したことで来場者が例年より大幅に減少した。

②本年度は、大学院の受験方法や研究生志願手続きに関する質問が比較的多かった。

（戚 記）



外国人学生のための進学説明会（大阪会場）

4. 3 交換留学生のための大学院進学説明会

国際交流がますます盛んになるにつれ、海外交流提携校から本学への交換留学生在が年々増加してきている。より優秀な大学院生を獲得するため、交換留学生を対象に本学大学院における各研究科の教育・研究の特色や入試内容・日程等に関する情報を提供する目的で、留学生・国際交流センターでは、平成 23 年度から「交換留學生のための大学院進学説明会」の開催を実施してきている。平成 27 年度も例年通りに実施され、その概要が以下の通りである。

<実施概要>

日 時：平成 27 年 7 月 21 日（火）13：30～14：00

場 所：留学生・国際交流センター 4F「国際交流学習室」

参加者：本学に在籍している交換留學生（特別聴講生）

配布資料：①大学院入試関係スケジュール表

②国際学研究科学生募集要項

③教育学研究科

④工学研究科学生募集要項

⑤農学研究科学生募集要項

⑥本学大学院担当教員教育研究専門分野一覧表

プログラム：

①開会挨拶：横田信三（留学生・国際交流センター長）

②各研究科の紹介：威 傑（留学生・国際交流センター准教授）

③大学院入試関係スケジュール：飯島賢道（留学生・国際交流課課長補佐）

④質疑応答

（威 記）



開会の挨拶：横田信三センター長



入試関係の説明：飯島賢道課長補佐



4. 4 海外同窓会活動のための意見交換（ベトナム／台湾）

2015年度も、独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が主催する日本留学フェアへの参加の機会を利用して、ベトナムと台湾で本学卒業生らと意見交換会を行った。

(1) ベトナム

ベトナムでは、昨年度に引き続き多くの同窓生・在学生の出身地である中部の都市ダナンを訪れ、同窓生6名と意見交換会を開いた。また、昨年に引き続きダナン大学工科大学を訪問、本学同窓生のいる建築学科および電子・通信工学科を訪ね、所属教員と大学間の協力、特に本学の教員が訪問して特別講義を行うことへの期待等について意見交換をした。さらに、今回は建築学科で授業時間の一部を使わせていただき、学科所属の学生たちに対して直接に本学の概要や次年度発足する都市デザイン科学部の教育に関する紹介を行った。学生に対面して直接交流する大変貴重な機会となった。今後も交流協定締結の可能性を追求しつつ、引き続き多くの人に留学生として本学に学んでもらえるよう、交流を続けていきたい。

また、ハノイに移動して、今回は多くの同窓生の都合があいにくく参加できなかったけれども、日本政府関係機関の現地事務所を通訳として働く元交換留学生とも意見交換をし、現地の日本での学習・研究に対する関心等について新しい情報を得た。

（吉田 記）



10月29日 ダナンにて同窓生と



10月30日 ダナン大学工科大学にて



10月30日 ダナン大学工科大学にて学生と



10月30日 ハノイにて

(2) 台湾

台北で開催された日本留学フェアの機会を利用して、7月20日（日）の夜、国賓大飯店を会場に、本学卒業生との同窓会を開催した。当日は約20名の卒業生が集ったほか、台湾在住の日本人卒業生や留学中の交換留学生も駆けつけた。宇都宮大学の近況を紹介したほか、卒業生の近況や卒業生相互の交流状況などについて情報交換を行うなど、台湾における本学の広報や学生募集などに向けた協力の可能性や課題について意見交換を行った。

代表の Nedy Chen さんから、新たに「宇大の台湾同窓会」という Facebook グループを立ち上げ、互いに交流や情報発信を行っていることについて紹介があった。留学フェアのようなイベントの際にも積極的に情報発信し、盛り上げて行くことが可能とのことであり、今後、留学生・国際交流センターの Facebook ページともリンクさせ、相互に情報発信を行っていくことを確認した。



卒業生との同窓会（台北）

(3) タイ

バンコクで開催された日本留学フェアの機会を利用して、タイにおいて同窓会を開催することは日程の都合上叶わなかったが、本校卒業生が教員を務めている2大学を訪問し、情報交換を行った。

12月14日（月）は、タイで唯一の私立大学であるパンヤピワット・インスティテュート・マネジメント（PIM）を訪問し、本学の概要説明を学生に対して行ったほか国際交流担当教職員と意見交換を行った。その後、協定校であるカセサート大学を訪問し、副学長2名をはじめとする5名の本学卒業生を交えた情報交換を行ったほか、林学部において学生の森林研修の打合せを行った。本学の複数の卒業生が、大学の運営を担っているという事実に感銘を受けた訪問であった。



PIMにて



カセサート大学にて



5 日本人学生の海外派遣留学の推進・支援

5.1 海外留学説明会

グローバル人材の育成が叫ばれている今日、留学生・国際交流センターでは、海外に目を向け、交換留学はもちろん、短期の語学留学などに積極的にチャレンジしようとする学生を育成するため、学部新生を対象とした海外留学ガイダンスを入学後早い時期に開催している。「海外留学ガイダンス」では、海外留学の意義や海外留学に対する様々な支援の説明などを行った。また、昨年度から開始したオーストラリア・サザンクロス大学及びアメリカ・南イリノイ大学への海外英語研修プログラムについて、年度当初に各プログラムの説明会を実施した。

さらに、交流協定締結大学の増加に伴い、当然のことながら交換留学による派遣留学生数も年々増え続けている。留学を希望する学生の多様なニーズに的確に応えていくため、関係者全員が全力を挙げて支援事業に取り組んでいる。そのような中で、当センターでは、海外の交流協定締結校へ留学を希望する学生を対象に留学説明会を毎年開催し、併せて海外留学支援制度等の経済支援についての説明も行っている。海外留学の意義、勉強と生活上の注意点等について説明するとともに、『宇都宮大学海外留学ガイドブック』を配布した。

(1) 宇都宮大学におけるグローバル教育についての説明会

日 時：平成 27 年 4 月 10 日（金） 17：50～19：10

場 所：峰キャンパス 5B11 教室

内 容：1) 理事による概要説明

2) Learning+1 グローバル人材プログラムについて

3) 大学コンソーシアムとちぎ グローバル人材育成プログラムについて

4) 海外英語研修について

5) 短期留学、国際インターンシップについて

6) 経済支援について

(2) 海外英語研修説明会

日 時：平成 27 年 4 月 16 日（木） 17：50～18：50

場 所：峰キャンパス 5B11 教室

内 容：1) 海外英語研修とは

2) プログラムの内容について

3) 経済支援について

(3) 平成 27 年度海外留学説明会

日 時：平成 27 年 6 月 9 日（火） 16：10～17：30

場 所：峰キャンパス 4B33 教室

内 容：1) 開会挨拶 …………… 横田 信三（留学生・国際交流センター長）

2) 講話：海外留学について …………… 湯本 浩之（留学生・国際交流センター）

3) 宇都宮大学の交換留学（派遣）および語学試験・奨学金について …………… 留学生・国際交流課

4) 留学のための奨学金について …………… 学生支援課

6) 単位認定等について …………… 修学支援課

7) 海外留学と就活について …………… キャリア教育・就職支援課

(4) 交換留学フェア

日 時：平成 27 年 11 月 24 日（火） 17：00～18：30

場 所：UU プラザ

内 容：①交換留学からの帰国学生によるブース説明会

(留学生・国際交流課)



交換留学フェア

5. 2 国際インターンシップ

本学は「グローバル人材育成プログラム」の一環として、平成 24（2012）年度から、栃木県経済同友会や栃木県内に本社や事業所を置く民間企業と連携して、海外の支社や事業所等で就労体験を行う国際インターンシップを開始した。4 年目となる本年度は、夏期インターンシップで 10 名、春期インターンシップで 9 名の合計 19 名をベトナム、マレーシア、シンガポール、タイ、カンボジア、そしてフランスの計 6 ヶ国へインターン生として派遣することができた（下記「派遣実績」参照）。

留学生・国際交流センターでは、夏期および春期の休暇中の約 2 週間の実習に先立ち、体験者の報告をはじめ、国際インターンシップの概要やその手続などの説明を目的とした報告・説明会を開催したほか、インターン生を対象とした派遣前オリエンテーションを開催した。

また、運営面ではこれまで留学生・国際交流センターを中心に、参加者の選考のほか、事前指導や報告会などを進めてきたが、全学的な認知が拡がり、参加者も増加の傾向にある一方で、実施体制や危機管理体制の充実が求められてきた。そこで、今年度は「ワーキンググループ（WG）」の設置を具体的に検討した結果、従来の留学生・国際交流センターの教員 2 名とコーディネーター 1 名、および国際学部の教員 1 名の 4 名体制に、教育学部をのぞく工学研究科、農学部、新設される地域デザイン科学部からそれぞれ 1 名の教員を加え、さらに留学生・国際交流センター長をグループ長とした「国際インターンシップ WG」を学術国際委員会の下に設置して、新年度から始動していくこととなった。



国際インターンシップ」報告・説明会

(1) 第1回「国際インターンシップ」報告・説明会

日 時：平成27年5月13日（水）16：30～19：00

場 所：宇都宮大学 UU プラザ2階コミュニティフロア

参加者数：学生50名 来賓3名 教職員12名 計：65名

内 容（敬称略）：

（進行）湯本 浩之（留学生・国際交流センター）

- 1) 開会挨拶 …………… 横田 信三（留学生・国際交流センター長）
- 2) 平成26年度春期国際インターンシップ参加学生報告（6名）
- 3) 国際インターンシップ受け入れ先企業の報告 … 早坂 秀樹（株式会社エマール代表取締役）
- 4) アンケート結果報告 …………… 古川 容子（国際インターンシップ事務局）
- 5) 平成27年度夏期国際インターンシップ説明 …………… 阿部 好子（留学生・国際交流課）
- 6) 閉会挨拶 …………… 吉田 一彦（留学生・国際交流センター）
- 7) 懇談会・質疑応答

(2) 「夏期国際インターンシップ」オリエンテーション

日 時：平成26年7月16日（木）16：10～16：40

場 所：4号館4B33教室

内 容：「国際インターンシップについて」…………… 松井 貞（国際インターンシップ事務局）

(3) 第2回「国際インターンシップ」報告・説明会

日 時：平成27年11月16日（月）16：00～19：00

場 所：宇都宮大学 UU プラザ2階コミュニティフロア

内 容（敬称略）：

（進行）湯本 浩之（留学生・国際交流センター）

- 1) 開会挨拶 …………… 横田 信三（留学生・国際交流センター長）
- 2) 平成27年度夏期国際インターンシップ参加学生報告（10名）
- 3) 国際インターンシップ受け入れ先企業の報告 … 渡辺 健司（(株)キャム取締役執行役員）
- 4) アンケート結果報告 …………… 古川 容子（国際インターンシップ事務局）
- 5) 平成27年度春期国際インターンシップ説明 …………… 阿部 好子（留学生・国際交流課長）

- 6) 閉会挨拶 横田 和隆 (工学部教授)
- 7) 懇談会・質疑応答

(4) 「春期国際インターンシップ」オリエンテーション

日 時：平成 28 年 2 月 9 日 (月) 13:00 ~ 13:30

場 所：4 号館 A 棟 2 階 多目的ルーム

内 容：「国際インターンシップについて」..... 松井 貞 (国際インターンシップ事務局)

(5) 派遣実績

1) 平成 27 年度 夏期国際インターンシップ

	氏 名	学部・研究科	学年	実習先企業	実習期間	実習国
1	杉山 真柚	国際学部	4	花王 (株)	9/2 ~ 9/15	台湾
2	富田 珠友	国際学部	4	日光金属 (株)	9/7 ~ 9/18	カンボジア
3	三浦 拓也	国際学部	4	(株) エマール	9/7 ~ 9/18	ベトナム
4	梅津 杏菜	国際学部	3	(株) エマール	9/7 ~ 9/18	ベトナム
5	野田明葵葉	国際学部	3	(株) エマール	9/7 ~ 9/18	ベトナム
6	真壁 希予	国際学部	3	花王 (株)	9/2 ~ 9/15	台湾
7	鎌田 真輔	工学研究科	1	D P S	8/25 ~ 10/9	フランス
8	佐藤 悠晴	工学部	4	第一化成 (株)	8/24 ~ 9/5	マレーシア
9	初見 拓也	工学部	3	第一化成 (株)	8/24 ~ 9/5	マレーシア
10	志村 雄基	工学部	1	日光金属 (株)	9/7 ~ 9/18	カンボジア

2) 平成 27 年度 春期国際インターンシップ

	氏 名	学部・研究科	学年	実習先企業	実習期間	実習国
1	副島 理沙	国際学部	3	Pacific Hotel	2/15 ~ 3/6	カンボジア
2	石森 睦深	農学部	2	Pacific Hotel	2/15 ~ 3/6	カンボジア
3	高橋 昂大	農学部	2	(株) エマール	3/22 ~ 4/1	ベトナム
4	見留 隆浩	工学部	4	日光ケミカルズ	2/29 ~ 3/11	シンガポール
5	岩上 梨乃	工学部	4	日光ケミカルズ	2/29 ~ 3/11	シンガポール
6	小松 純也	工学部	3	C A M	2/24 ~ 3/8	シンガポール
7	三浦 果歩	工学部	2	大熊製作所	3/7 ~ 3/19	タイ
8	板谷 翔太	工学部	2	大熊製作所	3/7 ~ 3/19	タイ
9	坪井 文音	工学部	2	(株) エマール	3/22 ~ 4/1	ベトナム

5.3 海外渡航前危機管理オリエンテーション

留学生・国際交流センターでは、海外留学の推進を行うと同時に、複雑化する国際情勢や自然災害などから生じる危機から学生を守るため、学生一人一人の危機に対する意識の涵養を図るため、「海外渡航前危機管理オリエンテーション」を開催している。これは、交換留学や国際インターンシップで海外に留学する学生に参加を義務付けるとともに、夏休みなど長期休業期間を利用して海外に渡航する学生も対象としたものである。今年度は、夏期と春期の国際インターンシップの実施に合わせ、7月と2月の計2回実施した。



(1) 平成 27 年度第 1 回海外渡航前危機管理オリエンテーション

日 時：平成 27 年 7 月 16 日（木） 16：45～18：15

場 所：峰キャンパス 4B33 教室

- 内 容：1) 開会挨拶……………横田 信三（留学生・国際交流センター長）
 2) 危機管理について ……吉田 一彦／湯本 浩之（留学生・国際交流センター）
 3) 外務省ビデオ試聴「なぜ君がねらわれるのか」
 4) 危機発生時の対応について
 5) 緊急時の連絡先等について

(2) 平成 27 年度第 2 回海外渡航前危機管理オリエンテーション

日 時：平成 28 年 2 月 10 日（水） 12：50～14：20

場 所：峰キャンパス 4B23 教室

- 内 容：1) 開会挨拶……………横田 信三（留学生・国際交流センター長）
 2) 危機管理について ……吉田 一彦／湯本 浩之（留学生・国際交流センター）
 3) 外務省ビデオ試聴「なぜ君がねらわれるのか」
 4) 危機発生時の対応について
 5) 緊急時の連絡先等について

（留学生・国際交流課）



危機管理オリエンテーション

6 各種協議会等への参加

6.1 平成 27 年度日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議

(1) 実施概要

日 時：平成 27 年 11 月 13 日（金）午後 2 時～ 4 時 30 分

会 場：千里阪急ホテル「クリスタルホール」

主 催：大阪大学

出席機関・大学等：文部科学省・日本学生支援機構・50 大学

本学参加者：梅木 由美子（留学生・国際交流センター）

(2) プログラム

1) 外国人留学生の受け入れを中心とした留学生政策について（文部科学省による説明）

①日本語・日本文化研修留学生制度について

②留学生政策について（平成 28 年度概算要求等）

2) 日本語・日本文化教育研修共同利用拠点事業について（大阪大学による説明）

3) 質疑応答および事例報告（主な項目は以下の通り）

①フォローアップ調査（平成 26 年に実施）について

②就職支援について

③出身地域について

④各大学への配置について

⑤特色あるプログラムを提供している大学の事例紹介

（梅木 記）

6.2 平成 27 年度全国国立大学法人留学生センター長及び留学生課長等合同会議

(1) 実施概要

日 時：平成 27 年 11 月 6 日（金）

場 所：マリエールオークパイン那覇

主催大学：琉球大学

本学参加者：横田 信三（留学生・国際交流センター長）

阿部 好子（留学生・国際交流課長）

(2) プログラム（敬称略）

1) 関係機関による所管事項等説明

①文部科学省「留学生政策における最近の動き」

②独立行政法人日本学生支援機構

③公益財団法人日本国際教育支援協会

2) 基調講演Ⅰ 「安全保障貿易管理について～制度の概要と最近の取組～」

早野 幸雄室長（経済産業省 貿易経済協力局貿易管理部安全保障貿易検査官室）

3) 基調講演Ⅱ 「国際業務における危機管理」

須齋 正幸教授（長崎大学経済学部）

4) グループディスカッション「留学生の危機管理について」

5) その他

- ①次期当番大学及び平成 29 年度～ 31 年度当番大学について
- ②連絡事項及びその他

(横田 記)

6.3 平成 27 年度国立大学法人等国際企画担当責任者連絡協議会

(1) 実施概要

日 時：平成 27 年 12 月 17 日（木）～ 12 月 18 日（金）

場 所：かがわ国際会議場、香川大学講堂

主催大学：香川大学

テ ー マ：「大学に求められる国際貢献と地域貢献」

本学参加者：横田 信三（留学生・国際交流センター長）

阿部 好子（留学生・国際交流課長）

(2) プログラム

1) 基調講演：「ASEAN の小王国ブルネイと日本の外交政策」伊岐 典子（ブルネイ駐箚特命全権大使）

2) 文部科学省等からの施策説明

①「教育分野における国際戦略について」豊岡 宏規（大臣官房国際課長）

・インフラシステム輸出戦略

・国際バカロレアを活用した大学入試例

②「大学の国際課に関する文部科学省の取組と大学における安全保障貿易管理」

松本 英登（高等教育局高等教育企画課国際企画室長）

③「科学技術力の強化と大学の国際化」

坂口 昭一郎（科学技術・学術政策局科学技術・学術戦略官（国際担当））

3) 講 演：「これからの日本の国際協力と大学の役割」

加藤 宏（独立行政法人国際協力機構 理事）

(留学生・国際交流課)

6.4 平成 27 年度 第 2 回国立大学法人留学生指導研究協議会 兼 第 44 回大阪大学
留学生教育・支援協議会

(1) 実施概要

日 時：平成 28 年 2 月 3 日（水）13：30～19：00（懇親会を含む）

場 所：大阪大学吹田キャンパス 銀杏会館 3 階阪急電鉄・三和銀行ホール

主催大学：大阪大学

テ ー マ：「留学生アドバイジングとハラスメント相談対応体制との連携の在り方」

本学参加者：堀尾佳以（工学研究科機械知能工学専攻 留学生担当）

(2) プログラム

1) 説明：「学生の双方向交流の推進に関する予算案と政策について」

文部科学省高等教育局学生・留学生課

2) 事例紹介

①「広島大学国際センター・ハラスメント相談室等、留学生支援ネットワークによる取り組み」
中矢 礼美（広島大学国際センター准教授）

②「大阪大学国際教育交流センター・大阪大学留学生会・ハラスメント相談室と連携した取り組み」
魚崎 典子（大阪大学国際教育交流センター特任准教授）

3) 分科会：「留学生アドバイジングとハラスメント相談対応体制との連携の在り方」

①「大学の体制に関わる取り組み」

ファシリテーター：池田 裕（電気通信大学国際交流センター教授）

②「学生に関わる取り組み」

ファシリテーター：渡部 留美（名古屋大学国際教育交流センター特任准教授）

③「教職員に関わる取り組み」

ファシリテーター：有川 友子（大阪大学国際教育交流センター教授）

4) 各分科会からの報告と全体討論

（堀尾 記）

Ⅲ 教員個人活動実績

活動実績：横田 信三

1. 研究課題

	課 題	小 課 題
1	樹木の病原菌に対する防御機構の解明	カバノアナタケ菌に感染したシラカンバ幼植物体に生成する特異的タンパク質のプロテオーム解析
		カバノアナタケ菌に感染したシラカンバ幼植物体に生成する特異的ペルオキシダーゼ及びフェノール性化合物の MALDI/TOF/MS イメージング解析
		マツノカタワタケが生産する菌体外セルラーゼの精製に関する研究
2	木質系バイオマスの有効利用に関する研究	シイタケが生産する菌体外タンパク質のプロテオーム解析
		シイタケ菌床栽培中に発生する菌床代謝水中のタンパク質の解析
		マツノカタワタケが生産する菌体外タンパク質のプロテオーム解析

2. 研究活動および成果

2-1. 発表論文・著書

	著者名	論文名・著書名	掲載雑誌等, または出版社	巻・号, 頁	年月
1	Istikowati W.T., Aiso H., Ishiguri F., Sutiya B., Iizuka K., <u>Yokota S.</u>	Wood properties of kayu manis (<i>Cinamomum</i> sp.) planted in South Kalimantan, Indonesia	宇都宮大学農学部演習林報告	51	2015
2	飯塚和也、大島潤一、逢沢峰昭、大久保達弘、石栗太、 <u>横田信三</u> 、吉澤伸夫	森林・樹木における放射性セシウムの動態 (III) スギの苗木および幼齢木における放射性セシウムの経根吸収	宇都宮大学農学部演習林報告	51	2015
3	Takashima Y., Tamura A., Nosedo N., Tanabe J., Makino K., Ishiguri F., Habu N., Iizuka K., <u>Yokota S.</u>	Diversities of decay resistance and <i>n</i> -hexane-extractable contents in seven half-sib families from plus trees in todomatsu (<i>Abies sachalinensis</i>)	Journal of Wood Science	61(2), 192-198	2015
4	Wahyudi I., Ishiguri F., Makino K., Tanabe J., Tan L., Tuhumury A., Iizuka K., <u>Yokota S.</u>	Growth characteristics and wood properties of 26-year-old <i>Eucalyptus alba</i> planted in Indonesia	International Wood Products Journal	6(2), 84-88	2015
5	Tanabe J., Tamura A., Ishiguri F., Takashima Y., Iizuka K., <u>Yokota S.</u>	Inheritance of basic density and microfibril angle, and their variations among full-sib families and their parental clones in <i>Picea glehnii</i>	Holzforschung	69(5), 581-586	2015
6	Prasetyo A., Endo R., Takashima Y., Aiso H., Hidayati F., Tanabe J., Ishiguri F., Iizuka K., <u>Yokota S.</u>	Variations in growth characteristics and stress-wave velocities of <i>Zelkova serrata</i> trees from eight half-sib families planted in three different initial spacings	Journal of Forest and Environmental Science	31(3), 235-240	2015
7	Istikowati W.T., Aiso H., Ishiguri F., Sunardi, Sutiya B., Ohshima J., Iizuka K., <u>Yokota S.</u>	Study of radial variation in anatomical characteristics of three native fast-growing tree species of a secondary forest in South Kalimantan, Indonesia, for evaluation as pulpwood	Appita Journal	69(1), 49-56	2016

2-2. 学会発表

	著者名	発表題名	学会名等	要旨集、頁	年月
1	Ishiguri F., Aiso H., Wahyudi I., Ohshima J., Iizuka K., <u>Yokota S.</u>	Wood properties of tropical plantation trees	The International Symposium on The Innovative Utilization of Tropical Woods	Chungchon, Korea	2015.4

2	石栗 太、相蘇春菜、Yus Andhini Bhekti Pertiwi, Fanny Hidayati, Imam Wahyudi, 大島潤一、飯塚和也、横田信三	熱帯植林樹種における成長と材質の関係	第 25 回日本熱帯生態学会大会	第 25 回日本熱帯生態学会年次大会（京都）講演要旨集、p44	2015.6
3	相蘇春菜、梅原礼子、石栗 太、Imam Wahyudi, Wiwin Tyas Istikowati, Budi Sutiya, 横田信三	熱帯産広葉樹における樹体支持メカニズムの解明と多様性	第 25 回日本熱帯生態学会大会	第 25 回日本熱帯生態学会年次大会（京都）講演要旨集、p42	2015.6
4	竹内僚恭、相蘇春菜、石栗 太、Imam Wahyudi, 大島潤一、大久保達弘、飯塚和也、横田信三	インドネシアに生育した早生樹 Begarung における木材性質	第 25 回日本熱帯生態学会大会	第 25 回日本熱帯生態学会年次大会（京都）講演要旨集、p103	2015.6
5	Sunardi, Nakamura A., Ichikawa T., Ishiguri F., Ohshima J., Iizuka K., Yokota S.	Expression analysis of extracellular proteins from <i>Porodaedalea pini</i> grown on modified Norkrans medium with microcrystalline cellulose as carbon source	Cellulosomes, Cellulases & Other carbohydrate Modifying Enzymes Seminar	Cellulosomes, Cellulases & Other carbohydrate Modifying Enzymes Seminar Abstracts	2015.8
6	福田慎一郎、相蘇春菜、上高原 浩、吉永 新、大島潤一、石栗 太、飯塚和也、横田信三	カバノアナタケ菌 IO-U1 株に感染したシラカンバ幼植物体 No.8 におけるフェノール性化合物及びアクチン繊維の組織内分布	第 33 回日本植物細胞分子生物学会（東京）大会・シンポジウム	第 33 回日本植物細胞分子生物学会（東京）大会・シンポジウム講演要旨集、p155	2015.8
7	Irawati D., Wedatama S., Ishiguri F., Yokota S.	Effect of biological treatment by <i>Auricularia polytricha</i> cultivation on ozone treatment time of sengon (<i>Falcataria moluccana</i>) wood	7th International Symposium of Indonesian Wood Research Society	7th International Symposium of Indonesian Wood Research Society Abstracts	2015.11
8	Hidayati F., Ishiguri F., Takashima Y., Iizuka K., Makino K., Irawati D., Yokota S.	Decay resistance, heartwood color, and extracts contents in teak clones planted in Indonesia	7th International Symposium of Indonesian Wood Research Society	7th International Symposium of Indonesian Wood Research Society Abstracts	2015.11
9	石栗 太、サピット・ディロクスムブン、相蘇春菜、横田信三	パルプ生産のために選抜された <i>Eucalyptus camaldulensis</i> の木材性質の家系間変異	森林遺伝育種学会第 4 回大会	森林遺伝育種学会第 4 回大会講演要旨集、p16	2015.11
10	飯塚早紀、大島潤一、石栗 太、横田信三	カバノアナタケ IO-U1 株に感染したシラカンバ幼植物体 No.8 に生成する特異的タンパク質の同定および発現量解析	第 66 回日本木材学会大会	第 66 回日本木材学会大会 研究発表要旨集、p71	2016.3
11	相蘇春菜、Irawati D., 石栗 太、横田信三	裸子植物 <i>Gnetum gnemon</i> におけるあて材形成に伴う組織構造およびリグニン分布の変化の細胞別の違い	第 66 回日本木材学会大会	第 66 回日本木材学会大会 研究発表要旨集、p73	2016.3
12	竹内僚恭、Wahyudi I., 相蘇春菜、石栗 太、大久保達弘、大島潤一、飯塚和也、横田信三	インドネシア、中央カリマンタンの二次林に自生するパンノキ属 6 種における木材性質	第 66 回日本木材学会大会	第 66 回日本木材学会大会 研究発表要旨集、p77	2016.3
13	大島潤一、安達広大、杉山香織、飯塚和也、石栗 太、横田信三、小名俊博	ユーカリにおける細胞形態の樹幹内変異 (IV)– 細胞壁率の標準値を示す位置について –	第 66 回日本木材学会大会	第 66 回日本木材学会大会 研究発表要旨集、p170	2016.3

14	Prasetyo A., Aiso H., Wahyudi I., Wijaya I.P.G., Ishiguri F., Yokota S.	Wood properties among three <i>Eucalyptus</i> species planted for pulpwood production in Indonesia	第 66 回日本木材学会大会	第 66 回日本木材学会大会 研究発表要旨集, 170	2016.3
15	Pertiwi Y.A.B., Aiso H., Ishiguri F., Habu N., Yokota S.	Natural durability and isolation of antifungal compounds in <i>Neolamarckia cadamba</i> wood against white- and brown-rot fungi	第 66 回日本木材学会大会	第 66 回日本木材学会大会 研究発表要旨集, 171	2016.3
16	Istikowati W.T., Aiso H., Ishiguri F., Ohshima J., Iizuka K., Yokota S.	Derived wood properties of wood from three native fast-growing tree species in a secondary forest in South Kalimantan, Indonesia	第 66 回日本木材学会大会	第 66 回日本木材学会大会 研究発表要旨集, 213	2016.3
17	Sunardi, Ishiguri F., Yokota S.	Partial purification and characterization of β -glucosidase from a white-rot fungus <i>Porodaedalea pini</i>	第 66 回日本木材学会大会	第 66 回日本木材学会大会 研究発表要旨集, 240	2016.3
18	五十嵐瑛、大前宗之、山内隆弘、金野尚武、羽生直人、石栗 太、横田信三	ペクチンを添加したシイタケ菌床代謝水の菌体外多糖分解酵素活性の経時変化	第 66 回日本木材学会大会	第 66 回日本木材学会大会 研究発表要旨集, 240	2016.3
19	飯塚和也、金指 努、宮本尚子、大島潤一、石栗 太、横田信三	福島原発事故後 4 年 8 ヶ月間におけるスギの木部半径方向の ^{137}Cs 濃度の特徴	第 66 回日本木材学会大会	第 66 回日本木材学会大会 研究発表要旨集, 249	2016.3

3. 教育活動

3-1. 講義

	講義・授業名	前期 / 後期	種別・対象学年	単位数	備考
1	ノーベル化学賞周辺の化学	後期	基盤教育	2	
2	森林科学論Ⅱ	後期	農学部・1年生	2	分担 (2名で担当)
3	国際森林科学論	前期	農学部・2年生	2	分担 (6名で担当)
4	林産学実験	後期	農学部・2年生	1	分担 (2名で担当)
5	森林基礎化学	前期	農学部・1年生	2	
6	森林化学	前期	農学部・2年生	2	
7	森林資源利用学	後期	農学部・3年生	2	
8	森林化学実験	前期	農学部・3年生	1	
9	森林資源利用学実習	後期	農学部・3年生	1	分担 (2名で担当)
10	特別講義Ⅰ	後期	農学部・3年生	1	分担 (2名で担当)
11	特別講義Ⅱ	前期	農学部・4年生	1	分担 (2名で担当)
12	卒業論文	通年	農学部・4年生	6	
13	森林資源利用学特論	後期	農学研究科	2	
14	樹木生化学特論	前期	農学研究科	2	
15	林産化学特論	後期	農学研究科	2	
16	森林科学特別実験・演習Ⅰ	通年	農学研究科	2	
17	森林科学特別実験・演習Ⅱ	通年	農学研究科	2	
18	森林科学特別研究Ⅰ	通年	農学研究科	5	
19	森林科学特別研究Ⅱ	通年	農学研究科	5	
20	森林バイオマス学特論	後期	連合農学研究科	0.5	分担 (4名で担当)
21	森林資源物質科学合同セミナー	前期	連合農学研究科	0.5	分担 (8名で担当)
22	森林資源物質科学特別演習	通年	連合農学研究科	2	
23	森林資源物質科学特別研究	通年	連合農学研究科	6	

3-2. 卒業論文指導

	氏名	卒業論文題目
1	飯塚 早紀	カバノアナタケ菌 IO-U1 株に感染したシラカンバ幼植物体 No.8 における菌感染特異的タンパク質の同定および発現量解析
2	五十嵐 瑛	ペクチンを添加したシイタケ菌床代謝水の菌体外多糖分解酵素活性の経時変化
3	高田 皓平	タンニン塗料における抗酸化能の定量

3-3. 大学院生論文指導

		学年	氏名	論文題目
修士課程	副指導	M2	竹内 僚恭	Anatomical characteristics of wood from 10 tropical tree species growing in Indonesia
	主指導	D3	Wiwin Tyas Istikowati	Evaluation of wood properties for pulp production from three lesser known fast-growing species growing in Kalimantan, Indonesia
博士課程	主指導	D2	Sunardi	Purification and characterization of extracellular cellulases from a white-rot fungus <i>Porodaedalea pini</i>
	主指導	D2	相蘇春菜	Anatomical and chemical properties of reaction wood in tropical angiosperm tree species in respect of plant evolution
	主指導	D1	Yus Andhini Bhekti Pertiwi	Anatomical characteristics, wood properties, and wood durability of a fast-growing tree species, <i>Neolamarckia cadamba</i> grown in East Java, Indonesia
	主指導	D1	Agung Prasetyo	Variation of growth characteristics and wood properties in six superior <i>Eucalyptus hybrid</i> (<i>E. urophylla</i> × <i>E. pellita</i>) clones from North Sumatra, Indonesia

3-4. 非常勤講師

	勤務先	科目名	期間・回数	備考
1	新潟大学	応用生物化学セミナーⅡ	前期・計2回	

4. 研究費

4-1. 取得研究費

種別	資金源・種別等	研究課題	代表者	金額(千円)	期間
科学研究費	基盤研究C	カバノアナタケ菌に感染したシラカンバ幼植物体に生成する特異的タンパク質の画像解析	横田信三	4,000	H25.4 ～ H28.3
学外助成	受託研究費	木質系炭塗料を用いた健康向上資材等の開発	横田信三	500	H27.4 ～ H28.3
学外助成	受託研究費	モミ材の利活用に関する研究	横田信三	900	H27.4 ～ H28.3

5. 学内活動

種別	委員会・役職等	任期	備考
全学組織	学術国際委員会	H26.4～H28.3	
全学組織	留学生専門委員会・委員長	H26.4～H28.3	
農学部	農学部学術国際委員会・委員長	H26.4～H28.3	

6. 学外活動

6-1. 学会活動

学 会 名	役 職 名	備 考
日本木材学会	会員、木材教育委員会委員	
日本農芸化学会	会員	
日本植物細胞分子生物学会	会員	
日本質量分析学会	会員	
植物化学研究会	会員	
日本植物病理学会	会員	
日本核磁気共鳴学会	会員	
アメリカ植物病理学会	会員	
アメリカ質量分析学会	会員	
アメリカ植物生物学者学会	会員	
アメリカ化学会	会員	

6-2. 委嘱委員

組 織	委 員 会 名	備 考
(非公開)	(非公開)	H27.4 ~ H28.3
一般社団法人森林・自然環境技術者教育会	運営委員会、分野審査委員会	
公益財団法人農学会	技術者教育推進委員会	

活動実績：梅木 由美子

1. 研究課題

	課 題	小 課 題
1	上級レベルの日本語教育	上級レベル学習者への読解指導のありかたについて
2	ビジネス日本語教育	ビジネスシーンで求められる日本語について

2. 教育活動

2-1. 講義・演習

	講義・授業名	開講部局	対象学生	単位数	備 考
前期	初級日本語補習Ⅰ	留学生・国際交流センター	研究留学生、交換留学生、大学院生	なし	週3コマのうち1コマ
	日研生特別研究Ⅱ	留学生・国際交流センター	日本語・日本文化研修留学生	2*	担当教員2名
	日本語・日本文化Ⅱ	留学生・国際交流センター	日本語・日本文化研修留学生	2*	
	日本語アカデミックリーディングⅠ	基盤教育	学部1年生、編入生	2	2クラス
	日本語教育Ⅰ	国際学部	国際学部学生、特別聴講生	2	
	日本語教育特別演習	国際学部	国際学部生	2	担当教員3名
	国際学特別研究Ⅱ	国際学研究科	国際学研究科博士後期課程2年生	2	通年（前期のみ担当）
後期	初級日本語補習Ⅰ	留学生・国際交流センター	研究留学生、交換留学生、大学院生	なし	週5コマのうち1コマ
	日研生特別研究Ⅰ	日研生特別演習Ⅰ	日本語・日本文化研修留学生	2*	担当教員2名
	日本語・日本文化研究Ⅰ	日本語・日本文化研究Ⅰ	日本語・日本文化研修留学生	2*	
	日本語アカデミックリーディングⅡ	基盤教育	学部留学生、特別聴講生	1	

*留学生・国際交流センターの授業科目としての単位

2-2. 論文指導等

修士論文指導（国際学研究科博士後期課程）

	学年	氏名・専攻	論文題目
主指導 (前期のみ)	2	張 婷婷 国際学研究専攻	1920年代の中国における俳句の翻訳とその影響

3. 学内活動

種 別	委員会・役職等	任 期	備 考
全学組織	基盤教育留学生日本語部会	H23.4～H28.3	
留学生・国際交流センター	初級日本語（補習Ⅰおよび補習Ⅱ） コーディネーター	H24.4～H28.3	
留学生・国際交流センター	日本語・日本文化研修プログラム コーディネーター	H18.4～H28.3	
国際学部	日本語教育プログラム委員会	H24.4～H28.3	



4. 学外活動

4-1. 学会活動

学 会 名	役 職 名	備 考
日本語教育学会	会員	
小出記念日本語教育研究会	会員	
日本テスト学会	会員	

4-2. 委嘱委員

組 織	委 員 会 名	備 考
(非公開)	(非公開)	H26.4. ～
(非公開)	(非公開)	H25.7 ～

4-3. その他の学外活動

鹿沼市国際交流協会日本語ボランティア養成講座講師（2015年6月25日～9月3日 全10回の講座のうち2回担当）

活動実績：吉田 一彦

1. 研究課題

	課 題	小 課 題
1	多言語コミュニケーション学	言語運用に本来的に見られる多言語性の解明
		多言語地域のコードスイッチングとコードミキシング研究
		成功した外国語学習者の多言語使用の研究
		言語規則に関する言語事実と言語規範との関係性
		学習者の視点からみた外国語教育観
2	一般言語学	類型論・対照言語研究 人の時間認識と時間表現に関する通言語的研究
3	言語学の哲学	科学哲学の下位分野としての確立を目指す

2. 研究活動および成果

2-1. 発表論文・著書

	著者名	発表題名	掲載雑誌等、または出版社	巻・号、頁	年月
1	学会誌編集部 (編)	海外日本語教育研究 創刊号 (ISSN 2189-9851)	海外日本語教育学会 (電子 出版)	1 巻 1 号	2015 年 12 月

2-2. 学会口頭発表

	著者名	発表題名	学会名等	要旨集、頁	年月
1	吉田一彦	西欧語学留学で (反面) 教師に学 ぶ - グローバル! ? だから何?	海外日本語教育学会 第 3 回研究会	論文化して学会誌 に掲載予定	2016.3.13

2-3. その他の研究活動

	種別・形態	研究課題名	期間	備考
1	海外日本語教育学会学会誌発行 に向けた作業	方法論検討、問題点確認	2012 ~ 2015	今年度達成
2	多言語社会における多言語使用 および外国語学習状況調査	ベルギー、ルクセンブルクに関し て調査	2015.8.9-31	今後も継続

3. 教育活動

3-1. 講義

	講義・授業名	前期 / 後期	種別・対象学年	単位数	備 考
1	多言語コミュニケーション学 A	前期	基盤教育・センター科目	2	英・日 2 言語による授業
2	Linguistic Typology and Language Communication	前期	国際学部・センター科目	2	英語による授業
3	日本語論述表現法 B	前期	国際学研究科・ センター科目	2	博士前期課程科目
4	国際交流と日本語教育	前期	国際学研究科	2	博士前期課程科目
5	日本語教育 II 演習	前期	国際学部	2	
6	日本語教育特別演習	前期	国際学部	2	4 週のみ担当
7	国際学基礎演習	前期	国際学研究科	2	博士後期課程科目
8	多言語コミュニケーション学 B	後期	共通教育・センター科目	2	英・日 2 言語による授業

9	日本語論述表現法 A	後期	国際学研究科・センター科目	2	博士前期課程科目
10	日本語教育 II	後期	国際学部	2	
11	卒業研究準備演習	後期	国際学部	2	卒業論文研究指導
12	国際学基盤研究	後期	国際学研究科	2	博士後期課程科目
13	特別研究 I	通年	国際学研究科	2	博士論文研究指導
14	特別研究 III	通年	国際学研究科	3	博士論文研究指導
15	国際交流特別研究	通年	国際学研究科	6	修士論文研究指導
16	国際文化特別研究	通年	国際学研究科	6	修士論文研究指導

3.2. 卒業論文指導

	氏名	卒業論文題目
1	金森 夏実	(3年、留学中) 未定(目上の人に向けた待遇表現の日・タイ研究)

3.3. 大学院生論文指導

		学年	氏名	論文題目
博士後期課程	主指導	D3	アセリ・スバゴジョエワ	進行アスペクトとテンスに関するキルギス語と日本語の対照研究
	主指導	D1	Tanh Ty My Binh	在日ベトナム人家庭における子供の言語教育について
	副指導	D3	仲田 和正	日本の図るべき人道的国際緊急援助政策 - 課題解決と戦略の構築
博士前期課程	主指導	M2	呉 程穂	中国人日本語学習者の擬音語・擬態語の習得状況に関する研究 - 習得上の難点を中心に -
	主指導	M2	ハルチュニヤン・カリネ	日本の英語教育の改善について - 日本における英語教育とアルメニアにおける外国語教育の比較から考える -
	主指導	M2	郭 珺	コミュニタリアニズムの視点から見た「多文化共生社会」 - 儒家思想を比較において -
	副指導	M2	周 小琳	中国人の飲食習慣に及ぼした日本食の影響とその原因 - 生食を中心として -
	副指導	M2	沈 宇萌	中国における幼児の外国語教育 - 瀋陽市のバイリンガル幼稚園と私立塾を中心に
	副指導	M2	凌 晨	言語学習者の会話パターンから見る中日第二言語コミュニケーションにおけるバリア
	副指導	M2	LIU XIAO BIN	Discourse Analysis of Representation of Women in Japan : A Case Study of Non-no from Oct.2014 to Sept.2015
	副指導	M1	黄 曉萌	日中両言語における「齷齪」と「工夫」という同形語の異なる意味の比較
	副指導	M1	張 微	日中二言語間における受動を表す文の対応関係
副指導	M1	羅 霄	日中大学における英語基盤教育で生じる第二言語喪失現象に関する研究	

3.4. 研究生研究指導

	氏名	研究題目
1	JERDNAPAPUN CHITCHANOK	タイ語と日本語の「体」の名前を用いた慣用語の比較
2	DAO YEN LINH	日本人の大学生など若者の外国人を相手にしたコミュニケーションストラテジー
3	楊 静思	外国語教育における異文化コミュニケーション能力の育成

3-5. 出張講義・模擬授業・特別講義等

	講義・授業名	期間	種別・対象学年	備考
	なし			

3-6. 非常勤講師

	講義・授業名	期間	種別・対象学年	備考
	なし			

3-7. その他の指導担当

	種別・形態	研究課題名	期間	備考
1	宇都宮大学国際学部国際キャリア開発 International Career Seminar	Living with Diversity of the World	2015.10.10-12	英語による合宿分科会講師
2	青年海外協力隊日本語教師集合研修講師	“文法”を読み直す－シラバス教材作成に生かす文法－	2014.9.16 2015.3.9	1回5時間、合計2回実施

4. 学内活動

種別	委員会・役職等	任期	備考
全学委員会	基盤教育人文科学系専門部会員		
学部委員会	非公開	2007年度より現在に至る	
センター内	日本語・日本文化研修生カリキュラムコーディネーター	今年度まで	
	広報委員長		(兼) ホームページ管理委員(日本語)
	国際交流推進部門としてのグローバル人材育成事業関連の諸業務		

5. 学外活動

5-1. 学会活動

学会名	役職名	備考
日本語教育学会	会員	
外国語教育学会	会員	
日本認知科学会	会員	
海外日本語教育学会	学会誌編集委員会委員長	

5-2. 委嘱委員

組織	委員会名	備考
国際協力機構青年海外協力隊事務局	ボランティア技術顧問(日本語教育等)	2014年度より現在に至る
国際協力機構青年海外協力隊事務局	技術専門委員(日本語教育)	2007年度より現在に至る
国際協力機構 JICA ナレッジマネジメント	日本語教育分野支援委員	2014年度より現在に至る



活動実績：戚 傑 (Jie Qi)

1. 研究課題

	課 題	小 課 題
1	多文化教育理論・方法論	日米欧における多文化教育の共通点・相違点
2	大学教育	アメリカの大学における教育理念およびカリキュラム改革
3	外国語教育の教授法	外国語習得に際しての母語・自文化の干渉プロセスに関する研究

2. 研究活動および成果

2-1. 発表論文・著書

	著者名	論文名・著書名	掲載雑誌等, または出版社	巻・号, 頁	年月
1	戚 傑	共生のための言語教育と多文化教育：日中同形語の語義転用からみる日中間の発想の相違点と類似点	白帝社	80 頁	H28.3

2-2. 学会発表

	著者名	発表題名	学会名等	要旨集, 頁	年月
1	Hannah Tavares, Jie Qi	Historical-Comparative Analyses of the Discursive Space of Images (査読あり)	2015 Annual Meeting of the American Educational Research Association アメリカ, シカゴ	http://convention2.allacademic.com/one/aera/aera15/index.php?cmd=Online+Program+View+Paper&selected_paper_id=942529&PHPSESSID=k6eftqohou74b7ek8nl2qrmfk1	H27.4

2-3. 国際会議 座長

	セッション名	学会名等	年月
1	Discourse, Ethics, Biopower	2015 Annual Meeting of the American Educational Research Association アメリカ, シカゴ	H27.4

2-4. 国際会議 査読委員

	国際会議・海外学会誌名	年月
1	2016 Annual Meeting of the American Educational Research Association ① Division B - Curriculum Studies ② SIG-Foucault and Contemporary Theory in Education	H27.7-8

2-5. 学術誌 査読委員

	学術誌名	年月
1	FORUM (ISSN 0963-8253) (Oxford OX11 9ZQ, United Kingdom)	H27 年

2-6. その他の国際連携研究活動

	種別・形態	研究課題名	期 間	備 考
1	プロジェクト	国際化と教育	H18.4～ 現在に至る	アメリカウイスコンシン大学マディソン校
2	共同研究	Systems of Reason and the Politics of Schooling: Alternatives Studies on School Reforms and Sciences of Education	H22.4～ 現在に至る	9カ国の学者による共同研究（日本、中国、アメリカ、アルゼンチン、スウェーデン、スペイン、ベルギー、ポルトガル、ルクセンブルク）
3	共同研究	Global Childhoods	H24.1～ 現在に至る	Asia-Pacific geopolitical region (Australia, Hong Kong, Japan, Korea, Malaysia, Taiwan, and Thailand)

3. 教育活動

3-1. 講義

	講義・授業名	前期/後期	種別・対象学年	単位数	備 考
1	中級聴解A	前期	留学生センター・留学生	1	
2	漢字と漢字文化	前期	留学生センター・留学生	1	
3	短期留学生特別演習A	前期	留学生センター・留学生	2	
4	中級聴解B	後期	留学生センター・留学生	1	
5	中級会話B	後期	留学生センター・留学生	1	
6	短期留学生特別演習B	後期	留学生センター・留学生	2	
7	Japanese Communication Arts	後期	基盤教育・1～4年次 留学生/日本人学生	2	英語による講義
8	移民と多文化教育	前期	国際学部 専門教育科目	2	
9	移民と多文化教育演習	前期	国際学部 専門教育科目	2	
10	卒業研究準備演習	後期	国際学部	2	
11	多文化教育特論	前期	教育学研究科・大学院生	2	
12	グローバル化と外国人児童生徒教育	後期	教育学部/国際学部1～4年次	2	他5名
13	多文化教育論	前期	国際学研究科・博士前期課程	2	
14	Methodologies of English Dissertation Writing	後期	教育研究科/国際学研究科/留学生センター 大学院生・研究生全学の日本人学生・留学生	2	英語による講義
15	国際学臨地研究	通年	国際学研究科・博士前期課程	8	
16	国際交流特別研究	通年	国際学研究科・博士前期課程	6	
17	学校教育特別研究	通年	教育学研究科	6	
18	多文化教育研究	後期	国際学研究科・博士後期課程	2	
19	国際学基礎演習	前期	国際学研究科・博士後期課程	2	
20	特別研究Ⅱ	後期	国際学研究科・博士後期課程	1	
21	国際学基礎演習	前期	国際学研究科・博士後期課程	2	
22	特別研究Ⅰ	後期	国際学研究科・博士後期課程	1	

3-2. 高校出前授業

授 業 名	高 校 名	年 月 日
唯一性の価値・多様性の価値	福島県立福島南高校	H27.10.8

3-3. 大学院生論文指導

		学年	氏名	論文題目
1	主指導	D2	森谷 亮太 国際学研究科・ 博士後期課程	Exploring the Discursive Formation of Color-blindness: A Theoretical Insight into School Color Vision Testing from a Social Model of Disability
2	副指導	M2	村上 滯生 教育学研究科・ 修士課程	環境教育に役立つ地域の教育資源：その継続的な活用
3	副指導	M2	加藤 ジオランデル 教育学研究科・ 修士課程教員免許プログラム	暴力的現実を克服する人間とは何か

3-4. 「宇都宮大学留学生・国際交流センター短期留学プログラム」修了レポート指導

	氏名	レポートテーマ
1	リサ・ディッセルホッフ（国際学部 交換留学生）	村上春樹作品の中心的テーマ
2	吳 芷函（国際学部 交換留学生）	日本の稲作文化
3	Saskia Schulz（国際学部 交換留学生）	沖縄語・そろそろ消滅？
4	Hlozkova Lenka（国際学部 交換留学生）	チェコ・スロバキアを訪れる日本人観光客向けの観光サービス
5	羅 寶欣（国際学部 交換留学生）	歌舞伎に見る日本人の美学
6	蔡 麗莎（国際学部 交換留学生）	結婚風習とタブーに関する日中比較
7	章 家綺（国際学部 交換留学生）	NHK 交響楽団の経営に関する一考察
8	歐 惠婷（国際学部 交換留学生）	日本の醤油食文化
9	ゲン ゴック・カイン（国際学部 交換留学生）	西尾維新の〈物語〉シリーズをベトナム語に翻訳するにあたって
10	キム ヘヨン（国際学部 交換留学生）	日本のお風呂文化について
11	ボンサッカチョン・ラウインダ （国際学部 交換留学生）	ココナッツミルクから作ったタイ料理とタイ文化
12	蔣 宛静（国際学部 交換留学生）	『ラブライブ！ School Idol Project』が人気である理由
13	周 昀（工学部 交換留学生）	三次元蛍光スペクトル
14	ラ ティ フェ（国際学部 交換留学生）	日本の通信制高校について
15	高 曉慧（国際学部 交換留学生）	夕顔の恋を通して見る平安時代における女性美に関する社会意識
16	陳 妍静（国際学部 交換留学生）	国民的アイドル：嵐
17	ソン・チュンマン（国際学部 交換留学生）	グローバルな日本の現代音楽
18	キム ヘソプ（国際学部 交換留学生）	現代の日本社会に生きている伝統：着物について
19	ジョン・スジ（国際学部 交換留学生）	日本から学ぶ地震対策
20	王 夢琪（国際学部 交換留学生）	お正月料理に見る日中の食文化の相違点
21	ソク ジェソン（国際学部 交換留学生）	日本のアニメについて
22	周 敏青（国際学部 交換留学生）	日本の高齢化社会に関する一考察

4. 学内活動

種 別	委員会・役職等	任 期	備 考
留学生・国際 交流センター	中級日本語短期留学プログラムコーディネーター	H20.4～現在に至る	
	中級カリキュラムコーディネーター	H20.4～現在に至る	
	英語関連科目	H14.10～現在に至る	
全 学	基盤教育人文科学系専門部会・部委員	H23.4～	

5. 学外活動

学 会 名	役 職 名	備 考
アメリカ教育学会	会員	
国際比較教育学会	会員	
日本教育社会学会	会員	
Reconceptualizing Early Childhood Education	会員	
Asia-Pacific Education Research Association	会員	



活動実績：鎌田 美千子

1. 研究課題

	課 題	小 課 題
1	第二言語としての日本語の使用及び習得に関する研究	第二言語によるパラフレーズに関する研究
2	第二言語としての日本語の教育方法及び評価に関する研究	アカデミック・ライティング教育に関する研究
3	日本語指導を必要とする児童生徒への日本語教育研究	教科学習に必要な日本語及びその習得に関する研究
4	日本語教員養成に関する研究	日本語教員養成に関する教育プログラムの開発

2. 研究活動および成果

2-1. 発表論文・著書等

	著者名	著書名	掲載雑誌等,または出版社	巻・号, 頁	年月
1	鎌田 美千子	第二言語としての日本語によるパラフレーズの諸相(査読有)	第二言語としての日本語の習得研究	第18号, 135-149頁	H27.12.
2	鎌田 美千子	第二言語としての日本語によるパラフレーズと引用—文章から意味を読み取って表す—(「第二言語での引用はなぜ難しいか」分担執筆)	第二言語としての日本語の習得研究	第18号, 170-172頁	H27.12.
3	鎌田 美千子	JSL 児童生徒への教科学習支援を目的としたリライト試案—プロフィシェンシーの観点から和語動詞に着目して—(査読有)	第10回 OPI 国際シンポジウム 基調講演・パネルディスカッション・研究発表予稿論集	111-114頁	H27. 8.

2-2. 学会口頭発表

	著者名	発表題名	学会名等	要旨集, 頁	年月
1	鎌田 美千子	JSL 児童生徒への教科学習支援を目的としたリライト試案—プロフィシェンシーの観点から和語動詞に着目して—(査読有)	第10回 OPI 国際シンポジウム実行委員会	第10回 OPI 国際シンポジウム 基調講演・パネルディスカッション・研究発表予稿論集, 111-114頁	H27. 8.

2-3. 報告書等

	著者名	報告書名	種別	頁	年月
1	鎌田 美千子	日本語教育ワークショップ報告書—ことばを言い換えて伝えるために知っておきたい三つのこと—	科学研究費基盤研究 (C)	全67頁	H28. 2.

2.4. 研究成果の公開

	会議名	開催場所	開催年月日	備考
1	日本語教育ワークショップ「ことばを言い換えて伝えるために知っておきたい三つのこと—教科書のリライトを例に—」	宇都宮大学 峰キャンパス	H27. 8. 8.	
2	同 上	山梨県生涯学習推進センター	H27. 10. 24.	
3	同 上	北海道教育大学 函館校	H27. 11. 7.	
4	同 上	山形市国際交流センター	H27. 11. 26.	

2.5. 国際会議出席

	会議名・任務	開催場所	開催年月日	備考
1	第 10 回 OPI 国際シンポジウム	函館国際ホテル	H27.7.31-8.2.	

2.6. その他の研究活動

	種別・形態	研究課題名	期間	備考
1	科学研究費基盤研究 (C)	JSL 児童生徒への教科学習支援におけるパラフレーズの活用—文章理解を中心に—	H25.4.-H28.3.	研究代表者
2	科学研究費基盤研究 (B)	大学・大学院でのキャリア形成に資する在学段階別日本語ライティング教育の開発と評価	H26.4.-H30.3.	研究分担者
3	科学研究費基盤研究 (C)	口頭発表時における質疑応答コミュニケーション能力を高めるための教育方法の開発	H26.4.-H30.3.	連携研究者

3. 教育活動

3-1. 講義

	講義・授業名	前期 / 後期	種別・対象学年	単位数	備考
1	アカデミック・ジャパニーズ	前期	基盤教育・1年	1	
2	アカデミック・ジャパニーズ	前期	基盤教育・1年	1	
3	日本語特別演習	前期	留学生・国際交流センター・1年	—	
4	日本語アカデミック・ライティング	後期	基盤教育・1年	1	
5	日本語アカデミック・ライティング	後期	基盤教育・1年	1	
6	日本語アカデミック・プレゼンテーション	後期	基盤教育・1～4年	1	
7	言語習得論	前期	基盤教育・1～4年	2	
8	日本語教育方法論	後期	国際学部・2年	2	
9	日本語教育方法論演習	前期	国際学部・3年	2	
10	日本語教育特別演習	前期	国際学部・3年	2	担当教員 3 名
11	グローバル化と外国人児童生徒教育	後期	国際学部・3年 基盤教育・1～2年	2	担当教員 6 名
12	卒業研究準備演習	後期	国際学部・3年	2	
13	卒業研究	通年	国際学部・4年	8	
14	言語教育論	前期	国際学研究科・博士前期	4	
15	国際交流特別研究	通年	国際学研究科・博士前期	6	
16	国際文化特別研究	通年	国際学研究科・博士前期	6	
17	国際社会特別研究	通年	国際学研究科・博士前期	6	

18	国際学臨地研究	通年	国際学研究科・博士前期	8	
19	国際学基礎演習	前期	国際学研究科・博士後期	2	
20	言語教育研究	後期	国際学研究科・博士後期	2	

3-2. 卒業論文指導

	氏名	卒業論文題目
1	小林正枝（主指導）	外国人生徒への学習言語習得支援—中学校社会科教科書に見られる「影響」に焦点を当てて—

3-3. 大学院生論文指導

	種別	学年	氏名	論文題目
1	主指導	D1	竹上 瑞穂	地域日本語教室における日本語習得支援に関する研究
2	主指導	M2	孫 文慧	中国の地方大学における日本語学習者のビリーフに関する研究
3	副指導	M2	趙 美慧	日中自動車産業政策に関する研究—中国における省エネ・新エネルギー自動車の普及を中心に—
4	副指導	M1	石川 由宇	意思決定に与える要因に関する研究
5	副指導	M1	霍 達	異文化適応に果たすソーシャルメディアの役割—中国人留学生の場合—

4. 研究費

4-1. 取得研究費

種別	資金源・種別等	研究課題	代表者	金額(千円)	期間
科学研究費	基盤研究(C)・代表	JSL 児童生徒への教科学習支援におけるパラフレーズの活用—文章理解を中心に—	鎌田美千子	1950	H25.4. - H28.3.
科学研究費	基盤研究(B)・分担	大学・大学院でのキャリア形成に資する在学段階別日本語ライティング教育の開発と評価	村岡貴子	195	H27.4. - H28.3.

4-2. 申請研究費

種別	資金源・種別等	研究課題	代表者	金額(千円)	期間
科学研究費	基盤研究(C)	パラフレーズの教育方法に関するハンドブックの開発—理論・実践・応用—	鎌田美千子	2130	H28.4. - H32.3.

5. 学内活動

種 別	委員会・役職等	任 期	備 考
全学委員会	基盤教育運営会議留学生日本語部会・部会長	H24.4～現在	
	基盤教育人文科学系専門部会・会員	H22.4～現在	
	留学生専門委員会・委員	H26.4～H28.3	
学部委員会	日本語教育プログラム運営委員会・委員	H24.4～現在	
	国際学部外国語ワーキンググループ・委員	H26.11～	
	上級カリキュラムコーディネーター	H20.4～現在	
センター内	日韓理工系学部留学生プログラム・コーディネーター	H20.4～現在	
	学部留学生日本語科目	H20.4～現在	
	学部1年生日本語補講	H18.4～現在	
	シンポジウム企画委員	H24.4～現在	

6. 学外活動

6-1. 学会活動

学 会 名	役 職 名	備 考
日本語教育学会	会員	
専門日本語教育学会	幹事	
異文化間教育学会	会員	
第二言語習得研究会	会員	
社会言語科学会	会員	
日本語教育方法研究会	会員	
大学日本語教員養成課程研究協議会	会員	
国立大学日本語教育研究協議会	会員	

6-2. 委嘱委員

組 織 等	役職・活動名等	備 考
日本語教育学会	学会誌委員会 査読協力者	
独立行政法人日本学術振興会	審査員候補者	

6-3. その他の学外活動

組 織 等	役職・活動名等	備 考
那須塩原市国際交流協会	平成 27 年度日本語指導者養成講座（初心者コース）講師	

活動実績：湯本 浩之

1. 研究課題

	課 題	小 課 題
1	開発教育・グローバル教育・持続可能な開発のための教育(ESD)・値ティズンシップ教育等の歴史研究や政策研究	欧州の新教育運動や英国のワールドスタディーズに関する研究
		英国や欧州連合における開発教育・グローバル教育・シティズンシップ教育などの政策に関する研究
2	参加型学習と参加型開発との比較研究	ワークショップやファシリテーションの理論や実践に関する研究
		P R A (参加型農村調査) や P L A (参加型学習行動) に関する研究

2. 研究活動および成果

2-1. 発表論文・著書等

	著者名	論文名・著書名	掲載雑誌等、または出版社	巻・号、頁	年月
1	湯本浩之	「開発教育における『先住民族』学習の経験と課題」	『国際教育』（日本国際教育学会紀要編集委員会、学事出版）	第 21 号, pp.121-127	2015 年 9 月
2	湯本浩之	「開発教育から見るポスト D E S D に向けた課題と展望：市民セクターによる教育ネットワークづくりに向けて」『社会教育としての E S D：持続可能な地域をつくる』	『日本の社会教育』（日本社会教育学会年報編集委員会、東洋館出版）	第 59 集, pp.194-204	2015 年 9 月

2-2. 国際会議出席

	会 議 名	開催場所	開催年月日	備考
1	アジア南太平洋基礎成人教育協議会 NGO 会合	韓国・インチョン	2015.5.17	
2	世界教育フォーラム（共催：ユネスコ・韓国政府）	韓国・インチョン	2015.5.18-21	

2-3. その他の研究活動

	種別・形態	研究課題名	期間	備考
1	共同研究	グローバル化と開発問題研究	2014 年度から継続.	主催：開発教育協会
2	共同研究	開発教育のアーカイブ研究	2014 年度から継続.	主催：開発教育協会

3. 教育活動

3-1. 講義・演習

	講義・授業名	前期／後期	種別・対象学年	単位数	備 考
1	ワークショップで学ぶ「変わりゆく現代社会と私たち」	前期	基盤教育	2	総合系科目／アクティブ・ラーニング科目
2	ワークショップで学ぶ「ボランティアと市民活動」	後期	基盤教育	2	総合系科目／アクティブ・ラーニング科目
3	グローバル教育論	後期	国際学部	2	
4	国際キャリア開発	夏期集中	国際学部	2	合宿セミナー（8月）
5	国際キャリア実習	不定時	国際学部	2	他2名の教員と担当
6	国際インターンシップ	不定時	全学科目	2	他2名の教員と担当
7	グローバル教育論演習	前期	国際学部	2	
8	卒業研究準備演習	後期	国際学部	2	

9	Globalization and Society	春期集中	全学科目	2	Learning+1
10	グローバル教育研究	後期	国際学研究科	4	

3-2. とちぎグローバル人材育成プログラム共通科目

	講義・授業名	日程	分野	単位数	備考
1	国際キャリア開発	8/29～31	キャリア形成	2	
2	Globalization and Society	3/16～18	グローバルな教養と日本の文化	2	

3-3. 「大学コンソーシアムとちぎオリジナル授業科目」

	授業名	学期	受入対象	単位数	備考
1	グローバル教育論	後期	他大学生 高校生 社会人	2	国際学部専門科目
2	ワークショップで学ぶ「変わりゆく現代社会と私たち」*1	前期		2	総合系科目／アクティブ・ラーニング科目
3	ワークショップで学ぶ「ボランティアと市民活動」*1	後期		2	総合系科目／アクティブ・ラーニング科目

3-4. 大学院生論文指導（国際学研究科博士前期課程）

	種別	学年	氏名	論文題目
1	主指導	M1	柳田 文 国際交流研究	中学校英語教育における開発教育と効果的な参加型学習の取り入れ方法
2	前期：副指導 後期：主指導	M2	伊藤 和也 国際交流研究	グローバル化社会におけるアフリカの学校教育と発展に関する一考察
3	前期：副指導 後期：主指導	M1	Silvia Alexia 国際交流研究	Transfer of knowledge from Japan to Gabon: The role of Scholarship and technical cooperation.
4	副指導	M1	佐藤 有里恵 国際交流研究	日本の地方都市におけるフェアトレード運動の普及の可能性と課題の一考察
5	修論副査	M2	蔣 百恵 国際社会研究	情報化社会における日本語教育の現状と問題点：ICTの活用を中心に
6	修論副査	M2	孫 文慧 国際文化研究	中国の地方大学における日本語学習者のビリーフに関する研究

3-5. 研究生研究指導

	氏名	研究題目	研究期間
1	高 岩	日中のNPOに関する考察	4/1～3/31
2	金 麟	中日両国における大学入試制度の比較	10/1～3/31
3	孫 斌	都市コミュニティ形成におけるNPOのマネジメントと役割に関する研究	10/1～3/31

3-6. 非常勤講師

	出講先	科目名	学期	単位数	備考
1	早稲田大学文化構想学部	ボランティアとNPO・NGO	後期	2	

3-7. 出張講義

	実施校名	講義・授業テーマ	年月	備考
1	福島県立福島東高校	参加体験型授業「“地球にやさしい”ってどういうこと？」	7月9日	国際学部出前授業
2	栃木県立佐野高校	参加体験型授業「“地球にやさしい”ってどういうこと？」	11月24日	国際学部出前授業

3-8. 講演・研修

	事業名	講演・研修テーマ	期間	備考
1	人権教育指導者専門研修(栃木県総合教育センター生涯学習部)	人権が尊重された社会をつくるために：地球市民教育としての人権教育を考える	9月8日	対象：自治体・教委担当者等
2	人権教育担当者スキルアップ研修(栃木県教育委員会人権教育室)	参加型学習の意義と実践：グローバルな視点とパーソナルなふりかえり	9月14日	対象：学校教員・教委担当者等
3	三市町村(大田原市・那須町・那須塩原市)人権教育部会合同研修会	参加・体験型学習で学ぶ人権問題：「わたし」の中の“排除”と“包摂”	12月8日	対象：小中学校教員

4. 学内活動

4-1. 各種委員会等

種別	委員会・役職等	任期	備考
全学委員会	学務委員会・委員	2014～2015年度	
	学生相談員	2014～2015年度	
	学術国際委員会・オブザーバー	2015年度～現在	
	キャリア教育・就職支援センター会議・オブザーバー	2013年度～現在	
学部委員会	国際キャリア開発プログラム委員会・委員	2013年度～現在	国際学部
	グローバル教育セミナー企画委員会・委員	2013年度～現在	国際学部
	(非公開)	2015年度	
センター内	国際交流部門担当	2013年度～現在	
	「研究論集・センター年報」編集担当	2014年度～現在	

4-2. 学内研究会

	事業名・主催者	講義・研究のテーマ	実施日	備考
1	Udai 教育セミナー(基盤教育センター)	第2回「フォトランゲージ：もっと写真を活用する」	6月17日	講師として話題提供。

参考 URL:<http://lgec.utsunomiya-u.ac.jp/wp-content/uploads/2015/06/b199fe7b6949f78d7638f2af0096d8d9.pdf>

5. 学外活動

5-1. 学会活動

学会名	役職名	備考
日本社会教育学会	会員	
日本環境教育学会	会員	

5-2. 委嘱委員

組織等	役職・活動名等	備考
公益財団法人日本 YMCA 同盟	「地球市民育成プロジェクト」リソースパースン	
公益財団法人生協総合研究所	「アジア生協協力基金」運営委員	
公益信託今井記念海外協力基金	諮問委員	



5-3. その他の学外活動（団体役職等）

組 織 等	役職・委員会名等	備 考
NPO 法人開発教育協会	副代表理事	

IV 資 料

1 留学生在籍状況

(1) 留学生種別在籍者数 (2015年5月現在)

種 別	所 属	人 数	小 計
学部留学生	国際学部	24	83
	教育学部	4	
	工学部	43	
	農学部	12	
大学院留学生	国際学研究科	55	110
	教育学研究科	4	
	工学研究科	37	
	農学研究科	6	
	連合農学研究科	8	
研究生	国際学部・国際学研究科	13	21
	教育学部・教育学研究科	3	
	工学部・工学研究科	3	
	農学部・農学研究科	1	
	連合農学研究科	0	
	留学生・国際交流センター	1	
短期留学生 (交流協定校との交換留学生)		33	33
日本語・日本文化研修留学生		9	9
教員研修留学生		0	0
日韓理工系学部留学生		0	0
科目等履修生		1	1
合 計		257	257

(2) 国別留学生数 (国数：29ヵ国)

国 名	人 数	国 名	人 数	国 名	人 数
中国	129	インド	3	アルメニア	1
マレーシア	29	バングラデシュ	3	スロバキア	1
ベトナム	24	ドイツ	3	メキシコ	1
韓国	13	チェコ	3	アルゼンチン	1
台湾	9	シリア	2	チリ	1
インドネシア	6	エジプト	2	エルサルバドル	1
モンゴル	6	ネパール	1	コスタリカ	1
ラオス	5	ミャンマー	1	ガボン	1
タイ	4	キルギス	1	アメリカ	1
スリランカ	3	イタリア	1		
				合 計	257

2 国際交流協定校との受入・派遣状況一覧

(1) 学生の大学間交流協定校との受入・派遣実績 (2015 年 3 月現在)

大学間交流協定校名	国名	区分	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	計
浙江工業大学	中国	受入	0	2	1	1	2	6
		派遣	0	0	0	0	0	0
カセサート大学	タイ	受入	1	1	1	2	4	9
		派遣	1	1	1	3	3	9
復旦大学	中国	受入	0	0	0	0	0(1)	0(1)
		派遣	1	1	0	1	0	3
ビクトリア大学	オーストラリア	受入	0	0	1	0	0	1
		派遣	2	2	2	2	1	9
祥明大学校	韓国	受入	2	4	4	2	4	16
		派遣	4	1	4	2	3	14
ノーザン・ブリティッシュ・コロンビア大学	カナダ	受入	2	0	0	0	0	2
		派遣	2	1	0	1	1<1>	5<1>
電子科技大学	中国	受入	1	2	2	2	2	9
		派遣	0	0	0	0	0	0
エアランゲン・ニュールンベルク・フリードリッヒ・アレクサンダー大学	ドイツ	受入	0	0	0	1	1	2
		派遣	4	4	4	4	3	19
浙江師範大学	中国	受入	3	3	3	3	3	15
		派遣	0	0	0	0	0	0
浙江大学	中国	受入	1	2	0	0	0	3
		派遣	1	2	3	1	1	8
内蒙古農業大学	中国	受入	0	0	1	0	0	1
		派遣	0	0	0	0	0	0
ボゴール農科大学	インドネシア	受入	1	0	0	0	0	1
		派遣	0	0	0	0	0	0
寧波大学	中国	受入	4	4	4	4	4	20
		派遣	0	0	0	0	1	1
国立台湾師範大学	台湾	受入	2	2	2	2	4	12
		派遣	2	2	2	2	1<1>	9<1>
香港大学	中国	受入	1	0	0	1	1	3
		派遣	0	3	3	2	3	11
国立政治大学	台湾	受入	1	0	1	1	1	4
		派遣	1	0	1	2	2	6
バラツキー大学	チェコ	受入	2	1	2	1	1	7
		派遣	2	2	2	2	2	10
モンゴル人文大学	モンゴル	受入	0	0	0	0	0	0
		派遣	0	0	0	0	0	0
ダッカ大学	バングラデシュ	受入	0	0	0	0	0	0
		派遣	1	1	0	0	0	2
モンゴル生命科技大学	モンゴル	受入	1	1	2	0	1	5
		派遣	0	0	0	0	0	0
天安蓮庵大学	韓国	受入	0	0	0	0	0	0
		派遣	0	0	0	0	0	0
ノースダコタ大学	アメリカ	受入	0	0	0	0	0	0
		派遣	2	1	2	0	0<1>	5<1>
オルレアン大学	フランス	受入	0	0	0	0	0	0
		派遣	5	3	3	2	3	16
アジア工科大学	タイ	受入	0	0	0	0	0	0
		派遣	0	0	0	0	0	0
全北大学校	韓国	受入	1	3	1	1	2	8
		派遣	0	0	0	0	0	0
東フィンランド大学	フィンランド	受入	0	0	0	0	0	0
		派遣	0	0	0	0	0	0
慶北大学校	韓国	受入	1	1	0	0	0	2
		派遣	0	0	2	1	1	4
トライン大学	アメリカ	受入	0	0	0	0	0	0
		派遣	2	2	1	2	2	9

アイルランド国立大学ダブリン校	アイルランド	受入	0	0	0	0	0	0
		派遣	0	0[1]	0	0	0[1]	0[1]
王立ブノンペン大学	カンボジア	受入	/	/	/	/	1	1
		派遣	/	/	/	/	0	0
合 計		受入	24	26	25	21	31(1)	84(1)
		派遣	30	26[2]	30	27	27[1]<3>	89[1]<3>

注1 斜線は、協定未締結を示す。

注2 平成25年度から、派遣交換留学の希望者は第1希望・第2希望の合計値。

注3 []は、ダブルディグリープログラムによる派遣で外数。

注4 <>は、私費留学による派遣で外数。

注5 ()は、特別研究学生としての受入で外数。

(2) 学生の部局学間交流協定校との受入・派遣実績 (2015年3月現在)

部局学間学術国際交流協定校名	国名	部局	区分	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	計
国立暨南国際大学 (人文学院)	台湾	国際学部	受入	1	2	1	1	3	8
			派遣	0	0	0	0	0	0
東華大学 (環境科学与工程学院)	中国	工学部	受入	0	1	0	0	0	1
			派遣	0	0	0	0	0	0
龍華科技大学 (工程学院, 電資学院)	台湾	工学部	受入	1	0	2	0	1	4
			派遣	0	0	0	0	0	0
釜慶大学校 (人文社会科学大学)	韓国	国際学部	受入	1	1	1	1	1	5
			派遣	1	0	2	0	1	4
イルクーツ国立言語大学 (国際事務局)	ロシア	国際学部	受入	2	2	2	0	0	6
			派遣	0	2	0	0	0	2
キングモンクット工科大学トンプリー校 (生物資源工学研究科)	タイ	農学研究科	受入	1	0	0	0	0	1
			派遣	0	0	0	0	0	0
斉齊哈爾大学 (外語学院)	中国	国際学部	受入	2	2	2	2	2	10
			派遣	0	0	0	0	0	0
ダマスカス大学 (人文学部)	シリア	国際学部	受入	1	0	0	0	0	1
			派遣	0	0	0	0	0	0
セントラル・ランカシャー大学	イギリス	国際学部	受入	0	0	0	0	1	1
			派遣	3	0	0	0	1	4
ポンティフィシアカトリック大学 (人文学部・社会科学部)	バレー	国際学部	受入	0	0	0	0	0	0
			派遣	0	2	1	1	0	4
国立台北大学 (人文学院)	台湾	国際学部	受入	0	1	1	0	0	2
			派遣	0	1	1	0	1	3
コリマ大学 (政治社会学部)	メキシコ	国際学部	受入	0	0	0	0	0	0
			派遣	2	0	0	0	1	3
遼寧科技大学 (機械工程与自動化学院, 電子与信息工程学院, 材料科学与工程学院)	中国	工学部	受入	0	1	0	1	1	3
			派遣	0	0	0	0	0	0
ハノイ大学	ベトナム	国際学部	受入	2	2	2	2	2	10
			派遣	0	0	0	0	2	2
トリア大学 (第II哲学部)	ドイツ	国際学部	受入	2	4	0	2	2	10
			派遣	3	3	3	1	3	13
華東理工大学 (機械与動力工程学院)	中国	工学部	受入	/	0	0	0	0	0
			派遣	/	0	0	0	0	0
国立暨南国際大学 (教育学院)	台湾	国際学部	受入	/	/	/	0	2	2
			派遣	/	/	/	0	0	0
東フィンランド大学 ※DDPのみ部局間扱い	フィンランド	工学研究科	受入	0	0	0	0	0	0
			派遣	0	[1]	0	0	0	0
合 計			受入	13	16	11	9	15	64
			派遣	9	8[1]	7	2	9	35

注1 斜線は、協定未締結 (部局間協定から大学間協定への移行を含む) を示す。

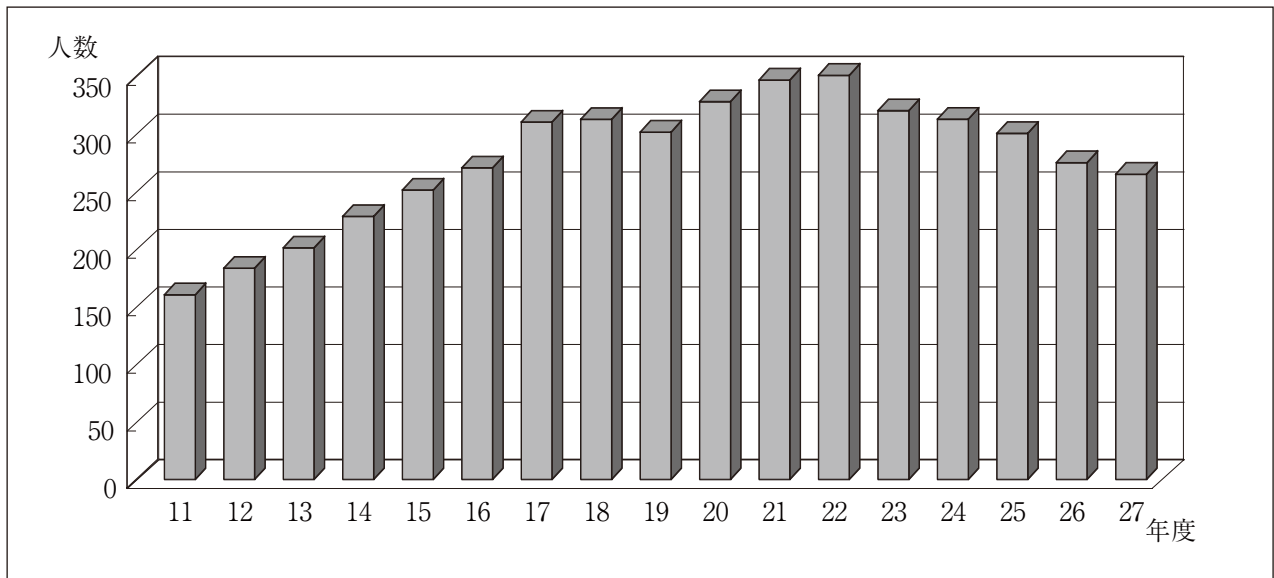
注2 平成25年度から、派遣交換留学の希望者は第1希望・第2希望の合計値。

注3 []は、ダブルディグリープログラムによる派遣で外数。



(3) 留学生数の推移

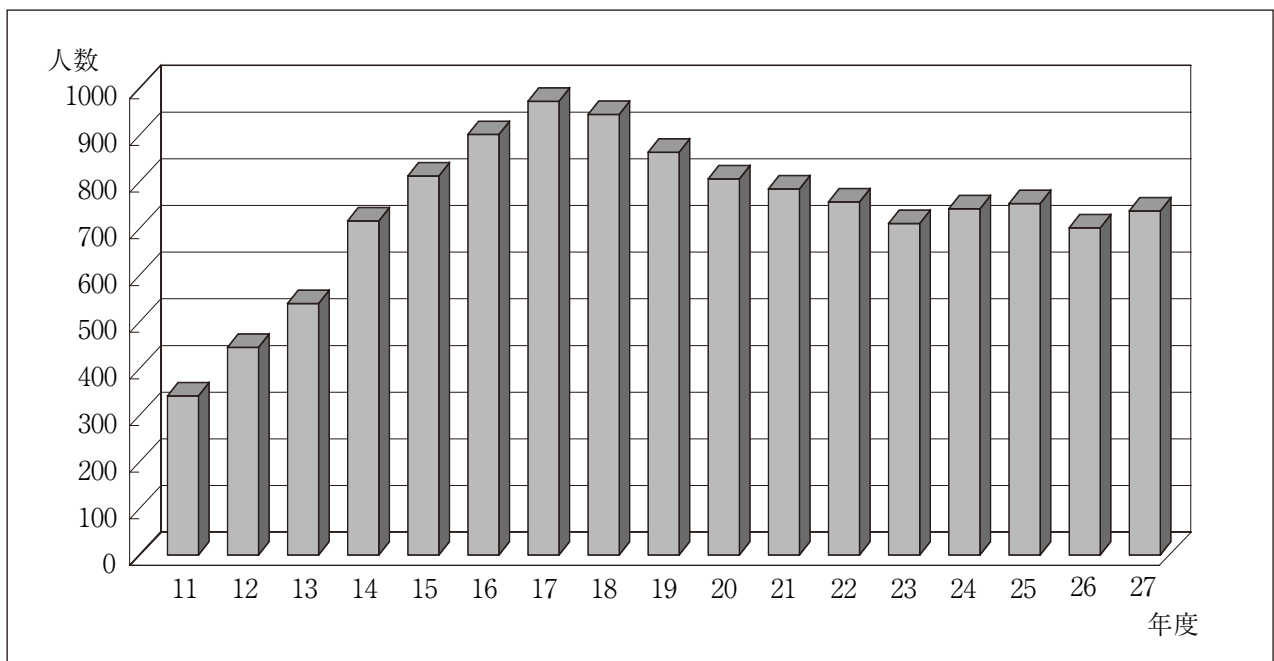
[各年 5 月 1 日現在]



年度	11 年	12 年	13 年	14 年	15 年	16 年	17 年	18 年	19 年	20 年	21 年	22 年	23 年	24 年	25 年	26 年	27 年
人数	153	176	193	221	244	264	303	306	295	322	340	345	313	305	284	263	

(4) 栃木県内高等教育機関に在籍の外国人留学生数の推移

[各年 5 月 1 日現在]



年度	11 年	12 年	13 年	14 年	15 年	16 年	17 年	18 年	19 年	20 年	21 年	22 年	23 年	24 年	25 年	26 年	27 年
人数	318	422	518	697	795	884	956	928	846	788	768	737	693	722	739	677	



3 留学生・国際交流センターの発行物

(1) 『平成 27 年度日本語科目授業案内 (Course Descriptions)』

(2) 『宇都宮大学留学生教育研究論集第 6 号 留学生・国際交流センター年報 2014 年度』 (2015 年 7 月)

(3) 『2014 年度日本語・日本文化研修留学生研修論文集』 (2015 年 12 月)

(4) 『Human Resources for Globalization with a Global Mind』 (グローバル人材育成パンフレット)

(2015 年 9 月)

宇都宮大学
留学生教育研究論集 第7号
留学生・国際交流センター年報 2015年度

発行日：平成28（2016）年8月20日

編集者：宇都宮大学留学生・国際交流センター
（編集担当：湯本浩之・吉田一彦）

発行者：宇都宮大学留学生・国際交流センター
〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350
TEL: 028-649-5099 FAX: 028-649-5115（留学生・国際交流課）
Email: ryuugak1@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp
URL: <http://intl.utsunomiya-u.ac.jp/index.html>

編集・印刷：株式会社アートプレス